

# 森教二のライフヒストリー研究(その2)

——和歌山県における生活綴方教師の一典型——

The life-historical approach to “Kyoji MORI” (II):  
a teacher of elementary school in Wakayama Prefecture.

船 越 勝

森 教 二

Masaru FUNAGOSHI

Kyoji MORI

(和歌山大学教育学部教育学教室)

(前和歌山市立野崎小学校)

2012年10月18日受理

## I 問題の所在

教師は、いかにして教師になるのか。和歌山県における著名な生活綴り方教師森教二は、いかにして森教二になったのか。本稿は、長年和歌山市の小学校教諭を歴任してきた森教二を和歌山県における生活綴り方教師の典型と見なして、森教二の教師としての成長過程

を教師のライフヒストリー研究にもとづきながら、分析・検討しようとするものである。

森の教師としてのライフヒストリーは、その時期区分は既に報告しているように、7期に分けられると私たちは考えている。それは、以下のような次期区分である。

時代区分	西暦	日本・世界の動き	ライフヒストリー	特徴的な体験とその要因・結果
I 期	1942		誕生	健康優良児。 3歳頃から病弱、医者通いの生活。 負われていたために父親の首筋ばかりを眺めていたように記憶している。
	1947		幼稚園入園	キリスト教系の幼稚園2年。 記念写真にはいつもひっこんでいる。登園をいやがり、幼稚園の前の上り坂で祖母をこまらせた。くう4
	1949		小学校入学	1年生の秋、友だちとピストルの撃ち合いをしていて、小田井用水にまっさかさまに落ち、額から大量の血を出す。 鼻が悪く、いつも鼻水を出していたために、3年生の時、隣の組の女性教師に、「ハナタレ」と言われたことが、今も記憶している。
	1955		小学校卒業	
	1958		中学校卒業	1年生から相撲部に入部。勉強とクラブ活動を両立できた。
	1958		高校入学	高校の小学区制から中学区制に変わる年、地元ではない伊都高校を受験。汽車通学を始める。 音楽部とESSのクラブに入る。
	1960		高校卒業	旧一期の大学受験のため、卒業式には出ない。
	1961		浪人生活	金沢大学、和大経済不合格のため、京都で1年間浪人生活。 葵祭、祇園祭、大文字焼き、時代祭など、京都の生活を堪能する。
II 期	1962		大学入学	和歌山大学入学 教育科学研究会に入部 生活綴り方班に入る。 1年の春 近畿ブロック生活綴り方合宿研究会に参加。生活綴り方のリアルズムに触れる。 近畿教育系学生ゼミナール。 2年、生活綴り方研究会として独立。(初代部長) 近畿ブロック綴り方合宿に、佐々木賢太郎先生が参加。(加太、青年の家) 田辺市元島での合宿に藤田五与先生が講師として参加される。 全国教育系学生ゼミナールが山口大学で開催。矢川徳光先生の記念講演。 毎年、近畿教育系学生ゼミナールと全国教育系学生ゼミナールに参加。 卒業論文「リアルズム綴り方教育論」、村山俊太郎、荒木ひで、佐々木昂、たちに惹かれ、北方の綴り方教師の姿をつねに追い求めるようになった。 近教ゼミなどでは、綴り方の歴史、特に、北方性教育運動のレポートや、実践分析「体育の子」(佐々木賢太郎)「やまびこ学校」(無着成恭)、「大地」(御坊小学校5年生の学年だより)などなどの実践分析をした。 卒業論文では、佐々木昂の「リアルズム綴り方教育論」にを学び、今日に広げ、書くことの意義を書いた。

				山田昇先生が赴任され、私一人が先生の「教育史特講」を聞き、胸を熱くして講義を受けたことを今もその時の気持ちを覚えている。
	1966		大学留年	微分積分学の単位が取れなくて、留年する。その1年間に小学校免許2級を取得する。
III 期	1967		野崎小学校赴任	<p>教員はじめての学校。4年生担任。          女の子一人に対する差別。(今でいういじめ)に苦しむ。学級崩壊状態のクラス。10.26の2時間ストライキに参加。全国同和教育研究大会(岡山)に参加。分科会で、一番に発言。          和歌山県教職員組合の県教研に子どもたちの詩を発表。          新任教師の会(研修で1か所の学校にあつま)でお茶を飲みながら、子どものこと、学校のこと、同僚のことを愚痴る。それが、作文教育のサークル「てのひら作文の会」となる。          4年担任。          民間教育研究集会夏の集会、全体会で、「新任教師1年間の歩みをふりかえって」を報告。          この頃から、県民間サークルの事務局に入る。(吉川先生、楠本先生、中山先生、宮本先生、岡本先生たちが事務局にいた。)          市教組青年部常任。          2年担任。          県教組青年部常任          教研担当。青年部教研を開催(大槻 健先生の記念講演)          結婚          4年担任。          教研・文化担当。青年文化祭を開催。(児童婦人会館の会場確保)映画「霧の旗」上映。          はぐるま研究会「南近畿大会」(県和商)に参加。          5年担任。          3年担任。          3年担任。特殊学級を来年度開設するというので、和歌山市内の学校を視察し、私たちの考える特殊学級像を出し、12月に校長から、「来年度の特殊学級の担任になってほしい」ということを告げられ、笠田から和歌山に移住してその期待に応えようとしたが、内示で転勤になり、市教育委員会をあいてにして、「不利益提訴」をしたたかかったが、うやむやのうちにそのままになってしまった。</p>
IV 期	1974		松江小学校へ転勤	<p>4年担任          2年担任          1年担任 初めての1年担任。体当たりの取り組み。「ひまわりつうしん」発行。          2年担任もちあがり。          「綴り方と子ども」(『綴り方の教室』 低学年)〈部落問題研究所〉          1年担任。「ひろば」発行。          近畿・東海兵庫(宝塚)大会直後狭心症の発作、引き続いて、10月から4カ月「急性肝炎」で入院。          2年担任、持ち上がり。親子文集発行。          回覧ノート「ひろば」をつくり、父母の中をまわるノートに様々な問題や悩み、話題を書いてもらう取り組み。          「父母よ、わが子育てを語れ」を「月報」(民研発行)に掲載。</p>
	1980		木本小学校へ転勤	<p>1年担任。          1年担任。          この年の秋に、産休講師の体罰問題が起こる。</p>
V 期	1982		楠見小学校へ転勤	<p>2年担任          4月1日の1日がかりの担任をきめるための、人対の交渉と希望を叶えられなかった先生への校長の説得。人対はコマをさわらないのを原則にしていた。夜11時を過ぎても、担任は決まらない。解散。          4月2日、担任発表。職員室に拍手が起こる。それからが大変。教務主任の互選。学年主任の互選。現職教育主任の互選等がつづく。          教員93名。63学級。新採用教員17名。青年部の教員(30歳未満)53名。          職場としての、新しい先生を歓迎するのをバスツアーとして明日香までいく。          教育実習生を担当する。          Mくんのこと(月報)          6年担任          いじめ問題に悩む。          1年担任          「お前は逃げたな」と藤田五与先生に叱責される。          2年担任          『道徳教育実践の探求』(あゆみ出版)          同和推進教員</p>

				学校だより90号発行 同和推進教員(和歌山市会長) 学校だより150号発行 2年担任 2年担任
	1990		雄湊小学校へ転勤	2年担任 「現職教員の実地指導」として、和歌山大学の非常勤講師となり、「道徳教育論」の5～6時間、碓井岑夫先生の時間をいただく。 2年担任
VI 期	1992		野崎小学校へ転勤	2年担任 2年担任 大学院 1年担任 3年担任 2年担任 2年担任 2年担任 2年担任 元右翼暴力団の保護者に8時間の軟禁状態にされ、「うちの子に怪我をさせないという念書を書け」と校長にせまる。
VII 期	2001		退職	退職と同時に、和歌山大学で「道徳教育論」を後期全部の時間と、「現代教師論」と、「教育学演習」を年間の3コマを担当。 県立高等看護学院 大阪明浄大学 県立なぎ看護学校 等で非常勤講師を続けている。 また、退職と同時に、「和歌山マジシャンズクラブ」に入会、今日では、事務局長・講師をしている。 そして、現在、和歌山市地方教育互助会の事務局長をしている。 県サークル連協の副委員長兼事務局長をしている。

本稿は、こうした森のライフヒストリー研究の第2報であり、森教二の教師人生における第IV期となる和歌山市立松江小学校と木本小学校に勤務していた8年間で分析の対象となる。とりわけ、松江小学校に勤務していた6年間は、小学校教師としても、生活綴り方教師としても、森は大きな成長を見せた時期であり、彼の教師人生においても、大きな意味を持っていたように思われる。

では、具体的に、この時期における森の教育実践・教育運動とそれを通じた教師としての成長の姿を見ていることにしよう。(船越)

## II 森教二のライフヒストリー

### －第IV期 教育実践の何かをつかみかけ、1年間の見通しを立てて実践し始めた時期－

#### 1. 松江小学校時代

野崎小学校から松江小学校への転勤に対する不利益提訴をしながら、野崎小学校に後ろ髪が引かれるようにして松江小学校へ赴任した。けれども、松江小学校へは来たくて来たと思いで思い込んで新しい生活を始めた。そこには、大学生の時の教育実習でのあのK先生がいた。当時の松江小学校の実践は、奈良女子大附属小学校の教育に学んで、毎年、奈良女附属の研究会には教員の半分ずつ2日間参加するという熱心な学校であった。私は6年間在籍したが、一度も参加していない。

初めの学年は4年生の担任であった。そこで、私の

教員時代のうちの12年間も同じ職場に勤めた平野長先生と出会った。平野先生は、それ以前でのエピソードとして伝わっているのは、同僚が大怪我をしたが1名病気休暇では補充の教員が配属されず、2人病気休暇でやっとひとりの補充者が配属される頃であったので、平野先生は自分が病気休暇の届けを出して一人の補充者ももらったという方であった。それ以来、先生が退職して、亡くなるまで、何かと交流させて頂いた。平野先生とは、松江小学校で6年間、木本小学校で1年間そして楠見小学校で5年間、同じ学校に勤めさせていただいた。それぞれの学校での取り組みの中では、必ず平野先生のことが出て来ると思うので、ここではこの辺にしておく。

学級だよりを柱にした教育実践を進めてきた。野崎小学校の時も、同じ学年の先生から、「森先生に学級だよりを出されると、私、しんどなるわ。」と言われた。内孫と外孫が同じ学年になったのである。一方の子どものクラスには学級だよりがあり、もう一方にはないとなると、発行していない先生のところに発行してほしいという要求がくるだろう。そうすると、担任はしんどくなるというのである。解らないわけでもなかったが、「先生は、長い間先生をしていて、子どもとの接し方もたくさん引き出しがありますが、私には、何もない。この学級だよりが頼りです。」といつも言うことにしている。

その当時には、あまり学級通信(学級だより)というものが、普及していなかったように思う。授業参観の

後などにその感想などを書いて貰う時、学級だよりについても一言書いてくれます。

◆「今までなかったことで、子どもが学校に行くようになってから、初めてのことで。最初、仕事をしている膝の上にポンと置かれて、もうと思いました、読んでいううち、何となく面白くなり、今では、読んでから色々と言っています。お忙しい毎日でしょうが、子ども同様、楽しみにしています。頑張ってください。」(4年生保護者)◆「学級だよりを毎回見せて頂き、学級の様子、子どもたちのことが、手にとるように身近に感じられて嬉しく拝見させていただいております。先生も色々とお多忙にもかかわらず、子どもたちのために夜遅くまでガリを切られるとのこと、本当に申し訳なく頭の下がる思いでいっぱいです。学級だよりの内容も、真に豊富で、子どもたちの作文やグループ日記等、全員にわたり次々載せていただいている点に先生の深い思いやりお心がしのばれます。グループ日記は、特に興味深く、子どもたちが率直に人のことや自分の考え、行動を反省し、いかにしてより良い学級をつくっていかうと努力している点が微笑ましく感じられます。先生も大変お忙しく恐縮でございますが、これからもできれば続けていただけたら子どもたちにとりまして、よい思い出として残り、幸甚に存じます。」(4年生保護者)◆「この学級だより発行につき、本当に良いことを考えられたものと、先生の常日頃の子どもたちに対する熱意の表れと感謝いたしております。この学級だよりを拝見すると、毎日授業参観に行った様に、クラス全体の様子がよく解ります。グループ日記については、クラス内の和合とかまた一人ひとりの意見など、各家庭ではわりと我が子の意見ぐらいしか知ることが少ないのに、こんな考えもあるのかと親として考えさせられたり、共に私達も子どもと一緒にいけるような気がいたします。今後も、子どもたちの意見など、お願い申し上げます。授業以外にこのような発行は、大変ご苦勞なことでありますので、毎日ではなくてもいいですから、是非続けてください。」(4年生保護者)

松江小学校の教育実践の方向は、子どもが書いてきたものを大事にし、それを手がかりにして学び合っていくという、私が大学生の頃に学び、野崎小学校で「てのひら作文の会」で学び合ってきたものと相違はないように思えたので、「見たこと帳」や「生活ノート」「ぼくのノート」「私のノート」の取り組みはすんなりと入ってきた。従って、始業式の次の日から書くことを始めることができた。この年に担任した何人かとはいまでも交流が続いている。

しかし、ひとつ、2年生の親たちの参観の感想のなかに次のような意見や要求があったのには驚いた。

◆そろそろ、教科書を家に持ち帰るようにしてはどうかと思えます。いつまでも1年生の延長のような気が

します。◆授業の事についてですが、今、松江だけの特殊なやり方ですが、他校のように本(教科書)を家に置いておき、時間割をきっちりと決めてその通りに授業を行うやり方がいいのではないかと感じております。

◆家庭において、予習復習のくせをつけたいと思うのですが、教科書を家に持って帰らせてほしいと思います。(こんな意見を聞くまで、実際、そういうことになっているとは知りませんでした。)

すぐに、他校同様、時間割をあわせられるように、教科書を全て家庭に置いておくことにした。今までは、国語の教科書を使わないで授業をしていたそうです。奈良女子大附属もそうであったとかということも、噂として聞いた。

野崎小学校時代から続いて、和歌山県民間教育サークル連絡協議会の事務局員をしつつ、「てのひら」のサークル活動は益々活発に例会や合宿、そして文集や機関誌を発行していった。組合では、和歌山市の教育文化部長(教文部長)に就き、県教組青年部の常任委員(教文担当)を務めていた。個人の実践でも、学級通信が実践の柱として位置づいていた。

松江小学校の取り組みについては、次のような分野に分けて記述していきたい。①子どもへの取り組みと父母との結びつき、②サークル運動、③組合活動、④その他とする。

#### (1)子どもへの取り組みと父母との結びつき

松江小学校に6年間お世話になった。担任した学年は、4年、2年、1年(初めての1年生担任)、2年(持ち上がり)、1年、2年(持ち上がり)である。

松江小学校での2年目、2年生の担任。学級だよりのNo.1には短いけれど、次のような文章がある。「始業式のあとでみんなに聞きました。『2年生になってうれしいと思う子。』すると、全員の子が手をあげました。さあ、2年生になったんだぞ、しっかりがんばらなくては!!とみんなが思っていることを知りました。先生の自己紹介、みんなの自己紹介も、大変上手にできました。男の子をだっこしてあげました。女の子はきのうだっこしてあげました。さあ、この1年間、からだに気をつけて、元気いっぱいがんばりましょう。森 きょうじ(とし 33歳)」

翌日、前日の始業式が終わり、帰宅して、学校であったこと、先生がきまったことなどをおうちの人と話したことを書いてもらいました。

家ではなしをしたこと おき じゅんこ

おかあさん せんせいのなまえは、森せんせい。せんせいは、なまえをじょうずにいうと、だっこしてあげようといいました。せんせいは、とってもやさしいせんせいといいました。わたしはこんなせんせいすきと、いいました。やさしいせんせいは、もう、はなれたらいいやだと、おかあさんにいいました。とってもやさしいせんせいと、おもいました。わたしは、こんな

せんせいはすきです。とってもやさしいせんせい。もう、がまんでできないぐらいすきです。

女の子に何回も好き好きといってもらい、嬉しく思っていました。でも、下線の部分が少し気になっていました。子どもは何も言わなかったが、家族の間では間もなく引っ越しをする話もしていたのだろうか。じゅんこちゃんは、その後、2週間ほど経ったとき、名草小学校へ転校していった。

担任した子どもが1年生であっても、2年生であっても、作文や日記、詩を書くことを大事にし、それを1枚文集的な学級便りに載せてきた。

徳永ゆき子さんは、「かみなり」と題して

このあいだ、学校のかえり、西の空がくもってまっくろになっていました。わたしは、夕立と思いました。そして、うちの近くへ来たら、いなづまが光って、かみなりがなりました。わたしは、あわててかえりました。山の方も、ピカッといなびかりが走りました。おにぎりのような雨がふってきました。こわかったです。

ゆき子さんは、少しあとで、「いもうと」と題して、日記に書いています。

私のいもうとの名前は、のり子といます。いつも、わたしはいもうとのことをのり子と言ったり、のりと言ったりします。わたしは、毎日、いもうとになかされています。わたしは、いもうとをいっかいなかせたいとおもいますが、一回もなかせません。どうしてかというと、かわいいからです。いもうとは、ふとっています。いもうとは、はやくようちえんに行きたいといっています。

妹の徳永統(のり)子さんは、3年後に1年生で担任することになった。

4月の参観日の後の一言感想の後ろに、徳永さんのお母さんが次のようなお便りを書いてくれた。「先生が黒板に問題を出しました。内気で友だちもなく、その上算数が大の苦手だった私は、それでも何度も何度も問題を読み、一生懸命考え、やっとノートに答えを書いて先生のところに持って行きました。それを見た先生は、『これ、誰かの見て書いたんやろ。』と冷たい目で私を見ました。驚きで声も出ない私は、おもいきり首を横にふりました。が、先生は、マルをしてくれませんでした。……。血が出るほど唇を噛み、涙をこらえ、一生懸命この屈辱に耐えましたが、純粋な子どもの心に大きな傷アトを残してしまいました。娘と同じ小学2年生の出来事でした。人を信じることはむつかしいことかもしれませんが、子どもは信じてやらねばなりません。『先生大好き』『学校大好き』と言って、楽しく通学する娘を見て、私はうれしく思うと同時にうらやましく思います。」

春の遠足で和歌山城へ行った帰り、和歌山市駅から電車に乗り込んだ。私はドアの前で立っていた。私の前に幸平君がいた。出発間際になって、幸平君が、「先

生、ぼく、うんこしたい。」と言い出した。即座に私は、「辛抱できるか。」と聞いた。幸平君は「うん。」と言った。

電車が出発し、紀ノ川の鉄橋を渡る頃、幸平君は、「先生、出てきた。」と言った。私には、何もできなかった。

やがて、下車する駅に着いた時には、もうほとんど大便が出てしまっていた。私は幸平君の家まで送って行った。まだ、太陽は真上にあり、ギラギラと照りつける中を、私は幸平君の後ろからついて行った。幸平君は、当時トレパンと言われていた白いズボンをはいていた。ズボンのお尻から靴のかかとの所まで、茶色い色ににじんでいるのを後ろから眺めながら歩いた。下痢をしていたようであった。

その光景が、もう40年近く過ぎるのに、ふっと、私の脳裏をかすめることが度々ある。なぜ、あのとき、「辛抱できるか。」としか言えなかったのかということが、ずうっと消えない。なぜ、他の先生たちに頼んで、幸平君を便所へ連れて行ってやらなかったのかと、悔やまれてしかたがない。なぜ、そんなことすら、考えが及ばなかったのかと、そのことが、私を責めてくる。(『和歌山の子どもと教育』2008年秋号 29号)

その後、幸平くんのお母さんは、参観・懇談の感想のなかに、このことについての一言があった。

「遠足の時、粗相をした時、親として友だちにからかわれはしないかと心配したが、そういうことがないとのことで安心しました。特に、森くんという子がみんながさわぎ始めた時、かわいそうやろと慰めてくれたそうです。他人の思いやりが、子どもとしても大変嬉しかったそうです。子どもにも、人に思いやりをもついい子になる様、話して聞かせました。」

3学期の初めに「冬休み中のことで、心にのこっていること」を作文に書いてもらうのが、毎年私の仕事である。子どもたちは、初詣や旅行やたこ揚げで遊んだことが多い中で、松本典子さんは、「ふゆやすみ」と題して

きょうで、冬休みはおわりです。とても、早く終わったかんじです。この休みは、お正月があったし、しんせきのおじさんがしんだりしたので、おとうさんやお母さんが忙しかったので、いもうとを見たり、おてつだいをしたり、わたしもたいへんいそがしかった。でも、おかあさんから、「おねえちゃんになった。」とか、「えらかった」とか、ほめられたし、わたしもすこしじしんがつかしました。おじいちゃんが、かせびきで、くすりや水をもっていたりして、けっこういそがしかった。

と自分の成長を書いてくれていた。

2年生最後の作文に「さようなら森先生」を書いてもらった。

さようなら 森先生 たきもと なおみ

おもしろくて、たのしいお話をしてくれて、ゆかいでした。きかん車や動物の声を出してくれたりしておもしろかった。1がっきに、先生にだっこしてもらったことをおぼえています。でも、はじめてだから、はずかしかった。みんなでてつぼうをやったとき、さかあがりができなくて、先生が、「もうちょっとですよ。」といて、はげましてくれてできたこともありました。いろいろのうたをおしえてくれて、たのしかった。クイカイマニマニというかわったうたも、ちゃんとおしえてくれたから、すぐにうたのもんくどうたいかたがいっぱつでわかりました。いろいろと、先生にお世話になってありがとうございました。

さようなら 森先生 雪野 淳

ぼくは、森先生のあだなを「たぬき」とつけました。それは、おながが大きくて、たぬきのはらづつみみたいだったからです。2年生になって、森先生がぼくらの組の先生で、はじめて見たとき、先生はやさしい先生だと思った。ちょっときびしかったけど、やさしい先生だった。おこったときは、ものすごくこわかった。

学級だより最終号に、「思いおこせば、4月、担任した初め、給食の後片づけさえまともにできなかった子どもたちは、今では、言われるまでもなく自分から進んできちんとできるようになりました。私自身頭にきたり、喜んだり、気持ちの揺れの激しい1年間でありました。ただ、気になりますのは、4月の初めのあいさつで、『ひとりひとりの子どもたちに、本当に行き届いた教育をする』と約束しておきながら、果たして子どもたちの心のひだにまで入り込んだ教育ができたかどうか、疑問です。反対に、子どもたちの心を荒れさせたことの方が多かったのではないかと反省しています。(中略)ただ、もっと私に対して厳しい批判もしてほしいし、もっとお父さんやお母さんと話し合いたかったと思います。(後略)」

笠松浩二先生に連れられて、京都の部落問題研究所へたびたびお世話になった<sup>1)</sup>。当時は、古い建物であった。佐古田好一先生にもお世話になった。そのご縁で、『綴り方の教室』の低学年に、子どもたちとその子らの作文を中心に執筆させていただいた<sup>2)</sup>。

#### i 初めて1年生担任

松江小学校3年目にして(教師になって10年目)、初めて1年生を担任することになった。何もわからないまま、全力投球の取り組みであった。「ひまわりつつしん」を書き、2年間の子どもの作文や詩や日記は6cmのファイル2冊になった。

たとえば、国語の教科書には、何も文字が書いていないのに、3日も4日もかかって見開きの絵を見て話し合いの授業をするのが難しかった。しかし、何回か1年生を担任して、この時間ほど面白いものはないと感じるようになった。この時間は、絵を見て、思ったことや考えたことを自由に語り合う文学教育の基礎の

部分であることが解ってきた。

通信は初めの頃は「学級だより」として発行し、子どもたちが学校で書いた短い作文を載せていった。その頃は、「ぼくのノート」「わたしのノート」として、4月初めから子どもたちにノートを持たせていた。但し、書くのは学校である。たとえば、次のような作文である。

ぼくは きのう かぶとの おみこしを かつぎました。おしろにいきました。(いわもと ひろあき)

ぼくは はらっぱに いくと、かまきりが いました。つかまえると とんで にげました。(のぐち ひろとし)

きのう わたしは ねつを だしたので、ねこんでしまいました。(ふなこし ふみじ)

きのう ぼくは しおひがりに いった かいを いっぱい とりました。(きし まこと)

ぼくは かたつむりを みつけました。そして ぼくは かたつむりを さわったら へっこみました。(にしやま たけし)

10号には「ひまわりつつしん」という題がつけました。

1学期はほとんど子どもたちの「ぼくのノート」「わたしのノート」から子どもたちの書いたものばかりを載せて、下校のまえに読んだ。

ぼくの いえに はちのすが あります。すの なかに ようちゅうが います。おやばちが かえらないうちに みます。(ふじいけ てるかず)

No.13に、あるお母さんから寄せられたお便りを載せた。

「松江小学校1年6組から生まれたひまわりつつしん。第10回目からすてきな名前もつけてもらい、早いもので第12回を先日、私は楽しみに読ませてもらいました。いや、読むというよりも、むしろ実によくおもしろい絵もある子どもたちの宝を、そっと眺めさせていただくような気持ちで、ひまわりつつしんを見ています。本当に、自分の子どもたちがこんなに大きな目で、数々の人間や生き物に働きかけ感動し、それを文字で表現でき得たうれしさで、心はわくわくしています。これからも、一人の母親として、子どもたちの書いていくひまわりつつしんを楽しみにしています。森先生のご努力とご真情に深くお礼を申し上げたい気持ちで一杯です。きっとすばらしい大きなひまわりの花が咲きほこると信じております。」と。

私は、どの学年を受け持っても、参観日や家庭訪問、夏休みが終わったとき、何か学校や学級の行事があった後には、必ず「アンケート(記述式)」をお願いしてきた。ある時は記名で、またある時は無記名で、順番に載せさせてもらってきた。今までの学級生活で、アンケートの公表は、学級活動にプラスに働いたことは事実です。参観日のアンケートには、授業や懇談の感

想と、授業や懇談に関係なく書きたいことを書いてくださいという、その部分がとても楽しみです。

あるお母さんのアンケートです。

いつも楽しみにしておりますひまわりつうしん。来る7月1日は参観日。また、その後学級懇談会もあるとのこと。いつも気になりながらも、3人の子どもの教室を見るのは一人15分。後ろ髪を引かれる思いで各教室を出ています。まして、学級懇談会などは、あちこち行っていると、話の内容もはっきり判らず終わってしまうのではないかと、心配しておりました。でも、1年6組はひまわりつうしんのお陰で、各お母さまのご意見、子どもの様子が手にとるように分かるだろうと安心いたしました。うちのように、子どもの多い家庭、また、出席したくてもお勤めや、家の都合で出席できない方のために、学級懇談会後のひまわりつうしん、よろしく願いいたします。

藤池くんのお母さんは、藤池くんが「ぼくのノート」を書くとき、庭の虫を書こうとしたら1時間くらいじっと虫を見ているそうです。2、3編の藤池くんの作文を見てみたいと思う。

ぼくの いえには チッチと ポッポという せきせいんこが います。おにいちゃんが ひがしせんせいに もらったのです。チッチと ポッポは きれいな こえで なきます。チッチと ポッポは なっばが だいすきです。なっばが ないと いつも かすを つついて だして しまいます。いつも ばんになると ふろしきを かぶせて あげます。このとりは おにいちゃんと ぼくの たからものです。(5/22)

かまきり

ぼくは きょう かまきりを みました。それで、びっくり したことが ありました。こおろぎを いっしょに いれといたら、かまきりが 一日で たべてしまいました。あめが やんだとき、そとで かまきりを つかまえたので、いれてやったら、ちいさい かまきりのほうが、大きい かまきりに たべられたのが びっくりしました。どんな かっこうで、たべたか いうと、ながい カマミたいな 足で おさえて ちょんぎりしました。口をとんがらして たべました。ちいさい かまきりも にげたら ええのに にげません。いれもんが ちいさいので、にげれなかったのか わかりません。大きな かまきりは、くいしんぼうで、小さいもん いじめすので きらいです。あしたからは、もう 小さい かまきりは いっしょに いれません。(9/13)

ゆき

きょう あさ おきて そとを 見たら、そとが まっ白でした。そして、おきて そとに 出て にわにある ゆきを とりにいきました。そして、あわてたので おとうさんの せったを はいて そとに

でました。おにいちゃんと いっしょに ゆきを いっぱい とりました。おにいちゃんは 手ぶくろをとりに いったので、ぼくのは ないから ぼくは じぶんで かばんの 中を 見ました。そしたら、かばんに ありました。手ぶくろを はめました。おにいちゃんも はめました。そして、ゆきだるまをつくるぞと おにいちゃんがゆうので、ぼくは ゆきを いっぱい あつめました。ぼくは くつに はきかえました。すみとも金ぞくも まっ白で、うらも まっ白で、山は きりで 見えなかった。ぼくは、いそいで、おかあさんに ゆうた。「おかあさん、山も 雪がふってるみたいで。」ぼくは、びっくり しました。おかあさんが、「きりでしょう。」というので、ふしぎに思いました。みちもどこもかも まっ白で、なにが なにか わからなかった。そして、ブロックの上も、木の上も、はっぱの上も、どこもかも まっ白でした。いつも ゆきが ふったら いいのになあと おもいます。学校にくるときも ふってほしい。(2/10)  
もう一人は、ロマンチックな文章を書く、船越 富美路さんです。

きのう わたしは いえに かえると ことりがいなくなって いました。わたしの いえに ちこ と ぴこが いました。おとうさんが ことりの かごを そうじしていた とき、まどを あけていたので、ぴこが にげて いってしまいました。おてらをさがしてみましたけど、みつきりませんでした。はたけや いろんな ところを さがして みたけど いませんでした。いえに かえると おかあさんが、こういいました。「とりやへ いって あおい とりを かって ぴこという なまえを つけてね。」といいました。ぴこの ことを おもいだすと、あつい なみだが ながれました。それは、ひなの ときから そだてたからです。これから、なん日たっても、ぴこの ことを わすれる ことは ないと おもいます。もりの なかでも いいから りっぱな ことりに なって ほしいと おもいます。(6/18)

きのう わたしは おとうとと いっしょに ねました。ねる まえに いつも まどを あけて ねます。まどを あけて そとを みたら、にげだしていった ぴこのことを おもいだして あつい なみだが できました。つきを みていると、つきの ひかりが、にげだして いった ぴこの はねに みえました。(7/10)

1年間69号の「ひまわりつうしん」を発行して、「ひまわりつうしん」によせて、『花の文化史』(春山行夫著)のなかの一節を載せた。「砂丘のひまわりは一日中クレヨンでぬったような青い海を見ている。燃えるような太陽の花は、夏のシンボルで、大きな子どもの帽子ほどもある。ピイチパラソルから出てきた子どもが、その下を通りがかって上を仰ぎ、『ヒマワリってずいぶ

ん背が高いなあ。』と言っては走り去っていく。海がさびれる頃になると、ヒマワリの花は黒こげの種子だけになる。子どもは、都会に帰って砂丘を思い出し、ヒマワリの大きかったことをなつかしむ。ヒマワリは、子どもの幻想の中では散らない。いつまでも頭の上で太陽のように咲き続ける。」と。そして、終業式前日を迎えた。最終号に次のようなコメントを載せた。

「昨年4月9日、小雨降る入学式。初めてこの子どもたちを受け持ちました。私の教師生活初めての1年生担任でした。大変しんどい1年間でした。お父さん、お母さん方も、大変不安なまどろっこしさを感じられたことだと思います。でも、もたもたしながら、同学年の先輩の先生の援助を受けながら、やっと1年間のゴールに着きました。ほんとに長くて、短い1年間でした。

全体に向かって話をしても、いちいち一人ずつ聞きにくるし、子どもたちには学級全体というつかまえていなくて、全部自分に言ってくれないと言ってくれたとは思っていないようでした。

初めの頃の苦労は、このことでした。1学期が終わる頃になると、私自身もそのことがわかってきたし、子どもたちも学級全体に目が向けられるようになりました。

学校というところは、こんなに楽しく、みんなと勉強できる場所なんだという実感を子どもたちが掴んでくれたのは、夏休みだったと思います。

学校は、友だちがいるし、勉強もするし、そして先生がいるところだと、子どもたちは長い休みを精一杯活動するなかでわかったのではないかと、子どもたちの便りで知りました。

5月の中頃から、あさがおの観察を始めました。私は芽が出てからほとんど毎日1枚ずつの写真を撮り続けました。小さな芽が出た喜びを文につづり、つるが出たといえば絵に描き文に書きました。夏休みもあさがおの観察を続けた子もたくさんありました。

9月、体育会の練習にも骨が折れました。1年生の先生たちみんなで大声のかれるまで大声を出しました。毎日毎日練習したかいがあって、当日は満点の出来映えでした。

「つるのはなし」を学習し始めてから、子どもたちの学習態度も段々良くなってきました。ドッジボールもこの頃から始めました。私も投げて投げて投げまくりました。つきゆびをした子もたくさんありました。翌日、手に包帯をしてきたのを見ると、気を打ちました。しかし、今は、私の方がよく当てられる位に、そんなに強くなりました。

9月10日は、元気だった子も11月12月になると、病気になるって休む子が増えてきました。

例年にない、寒い冬がやってきました。南国和歌山にも、積もる位の雪が降りました。学校の運動場で、

いくつもの黒い雪だるまを作りました。靴を通して冷たい水が足をぬらします。転がしては、ハーハーと手に息を吹きかけ、昔小さかった頃のことを思い出しながら、私自身、一生懸命に、子どもたちに負けてはならないと思いながら作りました。やぐらの近くに雪だるまを集めて、記念写真を撮りました。雪だるま作りは、私が一番楽しかったのではないかと思います。

怒ったこともありました。泣くほど叱ったこともありました。

私は、学校へ行くのが楽しい1年間でした。キザないい方をすれば、朝起きると今日も子どもたちに会える喜びで勇んで学校に来たものです。

私のこの1年間は、新しいことの発見の連続の1年間でした。それは、子どもたちの新しい発見の1年間でした。(中略)

『ひまわりつうしん』も今回で69号です。自分でも驚くばかりです。この10年間、学級通信は毎年出していたけれど、こんなに意欲的に出したのも今年が初めてです。『ひまわりつうしん』を見ると、文章を書き始めた頃と、大変な進歩をしているのに気がつきます。

2、3日休みが続くと、きっと便りをくれる1年6組の子どもたち、掃除など働くことが少しずつ好きになってきた子どもたち、勉強をできない子に親切に教えてやることもできるようになった子どもたち、ドッジボールなら、1年生で男子も女子も一番強い子どもたち、そんな良い子ばかりの子どもたちがいる1年6組。しんどい1年間でした。思ったことが十分できなかった1年間でした。でも、思い出に残る子どもたちでした。本当に、何もできなかったことをお許しください。そして、今後も、松江小学校の教育のためにご協力をお願いいたします。1977年3月23日 1年6組担任 森 教二

1年生の終業式の日、乙田とも子さんが、「先生、これ。」といって、おかあさんからのお便りを届けてくれました。

「森先生へ 春三月、わが家の庭にも時期遅れの赤い桃の花と桜の花が共に咲き始め、一年前の春を思い返して感慨深いものがあります。私どもの大切な女の子を小学校に入学させた時には、色々と迷うことも数多く、不安も大きくふくらむばかりでありました。幼かった女の子も先生のご努力で大きなすばらしいひまわりの花を咲かせてくれたと心より深く感謝しております。昨日、子どもの持ち帰りましたひまわりつうしんのしめくくりの森先生の文章を読ませていただきながら、鼻の頭が赤くなり、涙が流れてまいりました。本当に一年間ご指導ありがとうございました。」と。

当時の校長にひとそろいの「ひまわりつうしん」を進呈すると、次年度の初めに、通信を続けて発行したことへの賞賛を職員会議でしてくれていた。



## ii 2年生へ持ち上がり

翌年は、「ひまわりつうしん」の子どもたちを2年生に持ち上げることができた。

2年生での取り組みの一つに「ひまわりつうしん」お誕生日号特集を組み、一人1号の特集になる。初めて以前撮影してあった子どもの写真を載せ、本人は「ぼくのなおしたいところ」を書き、他の子どもたちからは「○○くんのがんばっているところ」を全員のせていく。最後に私が一言その子へのコメントを書く。一人1号、必ず自分の通信が発行されることになる。

6月の初め、初めて「森先生」という題で短い作文を書いてもらった。

先生は、やさしいからいいです。だけど、おなかはふとっています。先生は、たんそくみたいです。そして、先生の手も足もふとっています。先生は、よくたべるから、ふとるとおもいます。(岡田 ゆうじろう)

このごろ 森先生は、1年の時の先生とちがってきました。みんなが、2年生になったからと思います。でも、ちょっと、おかしいところがあります。2年生のドッジボールの時、森先生がさきにあたります。(津田 あきこ)

このごろ、森先生もこわくなりました。しゅくだいもおおいし、おこつたらものすごくこわい。先生は2年になってから、ものすごくきつくなりました。チャイムがなって、まだ こなかったら、うしろにたたされます。あそぶんも、あそべません。だからこわい。(岡田 あきよ)

「ひまわりつうしん」が通算100号を突破したとき、保護者の皆さんに「突破記念という意味もあって、お父さん、お母さんたちの文集を作ろう」と呼びかけたところ、半数以上の皆さんが文を寄せてくれた。それを「ひまわりつうしん」120号(7月19日発行)特集として20ページの文集を発行した。

初めにのところで、私が、濱田廣介著『大将の銅像』(大正11年刊)の「序の言葉」に島崎藤村が書いているのを全文載せている。その後、私の若干の言葉を添えている。「何とやさしい心でしょう。それでいて、子どもをこんなにまるごとつかまえたいい方でしょう。……今日、目の前にいる子どもは、もう、昨日の子どもではないというおどろきと、一人ひとりの子どもたちの個性が世界中のどんな書物にも載っていないという、つまり、青い蟬でありながら、全て特異な存在であるという子どもたちへの働きかけを今更ながら難しく思えてくるのです。……今、教育というコトバが『狂育』になったり、『養育』になったりしそうです。」と書いた。

この親の文集の中から、何人かの保護者の方たちの手記を載せたいと思う。

家事と仕事で毎日テンテコ舞いです。早く子どもが成人すればいいと、つい口に出しました。おばあちゃ

んが、それを聞いて、「子どもが成人すれば、親は老人になるから、子どもと喧嘩しながらごはんを食べている頃が一番人間の幸せの時だ。」と、私に教えてくれました。今日もまた、子どもに、何でこんなに悪い所ばかり親に似たのと、ヒステリーを出したいところを辛抱して、私の悪いところを直さなくてはと思ひ思ひの毎日です。子どもと、休みの日、ゴルフ場の近くの川へ小石を見つけに行きました。茶や緑や白、くろ、沢山の小石があり、私も子どもも上機嫌です。帰りに、水田でカエルをつかまえました。今も元気に鳴いています。(ひまわりの苗が沢山あります。ほしい人は持って帰って庭に植えて、夏に美しく咲かせてください。)(井上 わか子)

私の心の底に残っている小学二年生の頃の思い出の一つを取り出してみました。それは、同級生の家で、ホルスタイン(乳牛)が飼われていて、子牛が産まれるたびに乳風呂に入れることでした。最初の乳は少し黄みを帯びていて、飲むのに適していないため、お風呂のある家に持ってきてくれるのです。それを湯船一杯に入れてたくのです。この日は、友だちと一緒に話をしながら長い時間、何度もお風呂に入ったことを覚えています。今のように、「私のノート」「ぼくのノート」があれば、きっと、何ページにもわたっていろいろな思いを綴ったにちがいないと思います。字で書き表しておくことによって、読むたびにその頃をよみがえらせてくれるからです。森先生が、1年生の私のノート(僕のノート)のまとめの前書きに、「大人になった時、もう一度よみ返してみましよう。きっと懐かしさがこみあげてくることでしょう」と書かれていましたが、本当にその通りだと思います。その上、先生が一字一字書いて下さっているひまわりつうしんで、友だちの思い出もつことができ、子どもたちにとって、何にも変えることのできない宝物となると思います。長い人生で、悲しいことがあれば、子どもの頃の思い出が一番、心を和ませてくれるからです。(西山 美智)

ひまわりつうしん100号おめでとうございます。入学して410日余り、森先生と共に勉強したり、ドッジボールをしたり、友だちと一緒に遊んだり、家族の出来事など、子どもたちそれぞれの考え方、感じ方が素直に書かれており、毎日楽しんで読んでいます。これは、先生の熱意と努力によるものと思います。最初の頃、子どもに「今日の宿題は」と聞くと、「ぼくのノート、わたしのノート」正直いって、苦になりました。私も小学生の頃、日記をつけようと思って、日記帳を母に買ってもらいました。今思えば、どんなことでも書いておけば、子どもに、「お母さんの小さい時は、こんなだったのよ。」と見せてあげられるのにと、大変残念に思います。文章を書くということは、会話のように声の調子やまた、表情で表すことができないので、思ったことを飾ったり、作ったりせずに、素直に書け

ばよいと思います。友だちの文章を読むということは、それぞれ異なった味方や考え方が発見できるので、視野を広めることができ、大変勉強になると思います。ひまわりつうしんを1号からひもといてみると、和歌山弁(松江弁でしょうか)が、普段の言葉のままに書かれており、非常にかわいく、あどけなく、苦笑したのですが、最近は標準語が少し入ってきて、子どもなりに進歩しているのが、よくわかります。先生が、本当にうちとけて、子どもの気持ちになりきって、一対一で話し合っていて勉強されている様子が目に浮かびます。これから先、どのように進歩していくか、楽しんで見せていただきます。(岡田 ナナ子)

輝和君へ

お母さんが、輝君にお手紙書くのこれで何度目かな。たくさん書いたわね。それから、輝くんも、お母さんにいつもくわしいお手紙書いて渡してくれましたね。そのお手紙を読んで、お母さんは留守にしている間の輝君の行動が、お家にいるみたいによくわかって、どれだけ安心したか知れませんが。本当にありがとう。これからも、おかあさんの留守の時には、お手紙書いてくださいね。

今日は、輝くんが学校の宿題だといって、お母さんに原稿用紙を渡してくれたので、いつもとちょっと違うお手紙を書こうね。輝君が生まれたのは、昭和44年10月14日のお昼すぎでした。お兄ちゃんが生まれた時、とても難産でお母さんもお兄ちゃんも大変苦労したので、輝くんが生まれる時は、用心して早くから入院してあなたの誕生をみんなで首を長くして待ちました。でも、輝君は、みんなの心配をよそに、とても元気に大きな産声を張り上げてくれました。あなたの誕生を電報で、オーストラリアの沖で操業中のお父さんに知らせてあげました。折り返し、お父さんからも喜びの電報をもらいました。お兄ちゃんもあなたの誕生をとても喜んで、初めて面会に来てくれた日、おばあちゃんと病院へ来る道ばたで、コスモスの花を見つけ自分で花束を作ってお母さんとあなたに「お母さん、赤ちゃん、おめでとう。」と、ニコニコして、コスモスの花束をプレゼントしてくれました。その時、お兄ちゃんの顔、今でもあざやかに目に浮かびます。どんなお祝いよりも一番うれしかったです。お父さんが留守で、それまでお母さんと二人だけの家庭にあなたが授かったことの喜びは、小さなお兄ちゃんにもどんなに嬉しいことか、よくわかっていたのですね。それから、お父さんが帰って来られるまでの間いつも三人で寄り添うように生活してきましたネ。その生活は今もズーと続いています。お兄ちゃんも輝君もお父さん子で明るい子どもに成長してくれて、とても嬉しいです。

お母さんも小さい頃、お父さんが船乗りでいつも留守でした。だから、お父さんとゆっくり話したり遊んだ記憶はありません。お父さんが帰って来ても、側へ

寄ってダッコしてもらったり遊んだりするのが恥ずかしかったのです。それが、ズーと続いて大人になりました。お父さんと結婚するとき、一つだけ決心したことは、子どもが生まれるなら、絶対に私みたいな子どもにしたくない何でもお父さんに相談して普通の家庭の子どもたちのようにお父さんとの思い出をたくさん作ってもらいたい、父親との断絶なんて作ってほしくないということでした。今の二人は本当にお父さん子で、毎日一緒に生活しているお母さんが焼き餅焼きたくなるくらいお父さんと仲良しなので、本当に嬉しいです。お母さんでは、相談相手になってあげられないこともたくさん出てくることでしょう。そんな時、お父さんの留守がちなのが寂しく負担に思う時があるでしょう。でも、そんな時、お父さんはいつも側にいるんだということを忘れずに何でも相談できる子どもになってほしいと思います。そうして、お父さんが安心して働ける明るく健康な家庭を築いていきたいですネ。まだ、小さい輝君は、今、お母さんが書いた意味、はっきり理解できないかもしれないけど、これから大きくなっていつかこのお手紙を読み返してくれた時には、ちゃんと理解してくれることでしょう。

輝くん、病気しないで明るく、お友だちと仲良くして、何事にも力一杯ぶつかって行ける勇気のある子どもに成長してくださいネ。(藤池 芳子)

「パパの思い出」や「母よりあなたへ」「ひろあきくん」「成長記録として」「ひまわりつうしんによせて」等々の記録が寄せられました。あとがきに、私は、今度「親と子の両方の文集もつくりたい」と書いている。

この学級の子どもたちとのかかわりのエピソードをいくつか紹介したい。(『1977年和歌山の民間教育』P.58~71)

#### ①ヤドカリに口をかまれた井上くん

和同教教材研究会で高野山へ出張した留守の間の出来事でした。給食が終わって、日頃からヤンチャな井上が両手で口をおさえ、涙をポロポロ流しながら、職員室へ来たそうです。となりの担任の先生が手を離してみると、何と、下くちびるにヤドカリがぶら下がっている。養護の先生がハサミを開いて、やっとかちびるから離してくれたというのです。

翌々日、学校へ行って、その時の様子を聞くと、ヤドカリの手を出させるには、貝の口息を吹きかけるとよいので、フーフーと吹くと、ファーと手が伸びてきて、くちびるをガブリとやられたというのです。私も教えてもらってやってみると、その通り、大きなツメをファーと出してくるのである。井上くんの下くちびるは、まだ白くカマれたアトがくっきりとこのっていました。

#### ②イモリ、ヤモリ、トカゲ、食用ガエル

6月の中頃、朝教室に行くと、「先生、ヤモリ、ヤモリ。」と言いながら、わたしのまわりにまつわりついて

きた。水槽の中を見ると、大きなイモリが1匹赤い腹を見せて泳いでいた。他に小さなイモリが10匹ほど、おたまじやくしのように、チョロチョロと泳いでいた。私は、さっそく、夏の夜、カベやガラス戸にはいつくばって大きな口を開けて虫を食べているのがヤモリであること、土の上や草原を歩いたり走ったりするのがトカゲ(カナヘビ)であること、そして、水の中をオタマジャクシのように泳ぎ、腹がダイダイ色のものがイモリであることを説明した。

手の平の上に大事そうにのせて、「先生、これ、つるつるしてる。」と言っては、背中を見たり腹を見たりしていた。北山の池で、脇坂君がとってきたのだという。それから、4、5日たって、こんどは、大きな食用ガエルが水槽の中に座っていた。ガラス越しに見ると、一段と大きく、お腹の縞模様が気味悪い位である。イモリがゆらゆら泳いでいて、食用ガエルの背中にとまっては休んでいた。しばらくたつと、イモリは、食用ガエルに食べられてしまっていた。

### ③夏休みのはがき通信

先生、わたしは今、うれしくてうれしくてたまりません。こないだ、かせいプールに行って、およぐれんしゅうをしました。おもいきって、かおをつけてみると、うきました。それで、足をばたばたするとまえにすすみました。つぎの日、学校のプールではかってもらうと、5メートルおよげました。そして、わたしは、およげたらプールもおもしろいとおもいました。(岡田あきよ)

これは、夏休みになって、私の家に届けられたハガキです。

ぼくは、毎日およいだりつりに行っています。海の水はともしおからくて、口に入れるとノドがつまりそうです。ウニやかにとも、友だちになれました。つりに行って、ネコマタギという魚を2ひきと、大きなイナを2ひきつりました。えさは、ちいさなエビです。

夕がたになると、船がたくさんみなとへ帰ってきます。赤とうだいと、白とうだいがあります。氷を作って船にのせているこうばもあります。(藤池 てるかず)

私は、長い夏休みに、マンネリにならないように、一定の刺激を与えるために、「先生に5回お便りをだすこと」を宿題にしました。私は、毎年、7回くらい、全員に出しています。休みに入ると毎日5、6通の便りが届きます。

◎こがねぐも(津田 あきこ)

先生お元気ですか。わたしも元気です。先生、きのうお手紙ありがとうございます。わたしの家のうらに、大きいこがねぐもがいます。わたしは、こがねぐもをつかまえたなら、くものすにつけます。そしたら、1びょうもたたないうちに、糸でまいてしまいます。すのまん中にもってきて、しるをすいます。また、おもしろいこ

とがあったら、でんわかてがみを出します。(8/10)

◎先生 お元気ですか。わたしも元気です。わたしの家のうらのくもは、たまごをうんで、いなくなりました。いま、さがしているけど、いません。さようなら。(8/20)

◎わたしは、こがねぐもがにげたのを、やっと見つけました。でも、しんでいました。せっかく見つけたのにと、思いました。子どももうんだのに、かわいそうだから、おはかを作ってあげました。では、さようなら。(8/22)

津田さんは、自分の家のまわりのこがねぐものことを中心に、私に知らせてくれました。

○すいえい(貴志 まこと)

先生お元気ですか。ぼくも元気で、1回も休まずにプールに行ってきました。もう、プールはおわったけど、行ってよかったです。おへそを出して、あおむけになって、よううくようになりました。クロールでかおをようあげません。(8/8)

○15日に、しらはまに おかあさんとおとうさんとおねえさんとぼくと行きました。はじめて、海でおよぎました。プールより水がぬくいからいいです。プールでかおをあげるれんしゅうをして、あげられるようになりました。(8/18)

体力がないために、家庭でも気を遣って、水泳教室や体力開発センターにも連れていってもらっています。その成長も、手に取るように分かるお便りでした。

④「でんしょぼと」(松本 のぶただ)

私のところに届いたお便りのなかで、特筆すべきは「でんしょぼと」です。夏休み中、1回の休みもなしに42日間毎日1枚ずつのハガキを出し続けた、松本君に拍手を送りたいと思います。第16号から、「でんしょぼと」というおたよりの題もつけてくれました。松本くんの、「でんしょぼと」を少し紹介します。

(i) きょう、にゅうしがくさりしました。そして、きょう、はをぬきに行きました。はじめ、ちゅうしゃをしました。はのところで、はぐきのところにしました。そして、こんどは、はをぬくばんです。はじめ、てつで、ほうみたいなやつで、ちょっととりかけて、あとで ペンチみたいなやつで はをぬきました。(7/26)

(ii) きょうから、ぼくらのちくは、ラジオたいそうをはじめました。ぼくとごう(弟)とおかあさんと、ラジオたいそうをしに いきました。朝はやくにきたので、ごうは ねむそうなかおで やってました。このまま つづけて いく つもりです。(8/1)

(iii) きょうから 先生に出すおたよりに「でんしょぼと」というだいをつけました。よろしくね。先生、まい日、ぼくは ラジオ体そうにっているよ。おかあさんに、朝6時15分におこしてもらって、目をこすりながら、弟のごうと ぼくと ラジオ体そうに い

きます。いきしな、ごうが、まってまってとなきます。ラジオ体そうに行つて、さき はんこをする時があります。はんをおしに行く時、ぼくは、はしつて行きました。ごうがおそいので、「はしれよ。」つてゆうても、はしりません。ごうがないて、みんなにわらわれて、はじをかいたみたいでした。(「でんしょばと」16号 8/5)

(iv)きのう、ツメの長さしらべをして、ツメがのびてるから、きつてもらつて、ツメの長さははかつて、手は人さしゆびやけど、足は人さしゆびとちがうとおもいます。足の人さしゆびをなんとゆうかしてたら、おしえてください。じてんを見てわかりません。よろしく。(「でんしょばと」17号 8/6)

(v)きのう、おとうさんのかいしゃの見学がありました。てつを作るところを見てきました。まっ赤な太いてつを、長ぼつそくしたり、さきをまるのかたちにしました。あつかったです。おとうさんらが、あんなあついで、やつてるから、びつくりしました。(「でんしょばと」18号 8/7)

(vi)ふつかのとうこう日は、5人休んでいたけど、12日はみんなにあえるとおもつたら、二日より多く休んでいました。22日のとうこう日は、ひとりも休まんとあえるとおもいます。先生とあくしゆをして、先生が、「びょうきになるな。」といいました。先生はとてもやさしかったです。また、こんどのとうこう日にも、あくしゆをしてね。また、あした おたよりを出します。まつててね。(「でんしょばと」23号 8/12)

(vii)おぼんやから、あした おばあちゃんのいえに行つて、あさつては ならの おばさんのいえに行きます。だから、きょう、さんばつをしてきて、男まえにしてきて、先生にも男まえの頭を見せたいと思います。行つてきたおはなしは、こんどのおたよりに出します。先生も、おぼんにどつかにいきますか。(「でんしょばと」24号 8/13)

(viii)先生 おはようございます。おぼんなので、おばあちゃんのいえと、ならのおばさんのとこに行つて、3日かん、べんきょうを休んで、きょう あそびつかれて べんきょうしたら、しんどいので、なかなかべんきょうがすすみませんでした。あしたから、はりきつてします。先生もべんきょうがよていどおりにいつていますか。(「でんしょばと」28号 8/17)

(ix)きょう、ねびえで、かぜぎみになりました。夜、ハムスターがうるさいので、石をのせて外において、きょう朝見るといせんでした。石のすきまからにげたのか、石をもちあげてにげたのか、どつちかです。あきらめやんと、べんきょうをしてからさがします。そして、いっしょうけんめいにせわをしたのに、にげたから、にくらしいです。(「でんしょばと」36号 8/25)

(x)きょうで、夏休みがおわりました。きょう、「ぼ

くのノート」とおてがみをかいて、そのあと、二学きのじゅんびをします。そして、まい月とつて「かがくとがくしゅう」をします。あしたから、先生もがんばつてください。ぼくもがんばります。(「でんしょばと」42号 8/31)

松本くんが、毎日、先生に便りを出そうと思ひ、そして、42日間の夏休みを休むことなく出し続けさせたものは、なんだつたのでしょうか。病気になつた時にも、次のようなはがきを送つてくれました。

(xi)先生 こんにちは。きのうからつづいて、おふとんの中にねています。おなかがおされてるかんじみたいに いたいです。それでも、ぼくの大きき先生には おてがみは わすれずに出します。クスリをのんで、かしこく おふとんに ねていますので、すぐ元気になるから、あんしんして ください。また あした。(「でんしょばと」37号 8/26)

私は、夏休みのはがき通信を単なるハガキのやりとりという意味ではなくて、担任教師は自分のそばにいないけれども、一日の生活のなかでのいちばん書きたいこと(見たこと、したこと、聞いたこと、考えたこと、感じたこと)を先生に聞いてもらいたい、読んでもらいたい作文として位置づけています。ハガキを書くということは、全く子どもたちにとっては自主的であります。たとえ、宿題としてハガキを書くということでも始まつたけれども、どんどん出し続けることによつて、この話も先生に知らせておこうということになつていったものだと思います。一日の生活のなかで、時間的・空間的な切り取りのできる(表現できる)力を育てることは、作文指導といういい方であっても作文教育といういい方であっても、大切であらうと思ひます。単なる文章表現指導では、子どもの生活は律しきれはざありません。生活が表現を支えています。そのためにこそ、生活を大事にみていきたいし、子どもたちの生活を耕すことを重視したいと思ひます。生活を耕す、掘り起こすという表現は抽象的だけれど、子どもたちの遊びの生活を一番大切に、そこに依拠しながら、どんなことにも一生懸命からだを動かして、そのことから自分の頭でいろいろな思ひを感じられるようにしたいと思ひます。

夏休みの子どもたちの便りから、「いろいろなことに心をうごかした」ことを紹介したいと思ひます。

せんせい こんにちは。きのうのよる8時ごろ、新がたからかえつてきました。しんかんせんの中で、とてもたのしいことがありました。ぼくは、王せんしゆにあつて、につきにサインをしてもらいました。こんど、学校へもつていきます。(岡田 ゆうじろう 8/23)

先生 元気ですか。おとつ、お父さんが畑でこおろぎをつかまえてきました。その中のいっぴきが、かわをぬぎました。ぬけたこおろぎは、はねが白かつ

たから、きもちわるかったけど、だんだん黒くなりました。(きし まこと 8/23)

先生、ひとつもおたよりしなくて、ごめんなさい。もうすぐ学校であえますから、ぼくのひまわりのたねが649とれたので、おしらせします。ひまわりのかんさつをしていますから、見てください。さようなら。(西山 たけし 8/30)

先生 こんにちは。ぼくとこのひよこが、大きくなりました。黒のほうのとさかが出てきました。白のほうは、とさかが黒よりちょっと小さくなっていて、黒はもうすぐにわとりです。もうすぐ二学きですね。元気に行きます。(まつだいら ふみたか 8/29)

森先生 お元気ですか。わたしは元気です。もう8月です。朝からあせがたらたら出てきます。体にあせもが出てきています。このごろ、かんかんでりがつづいて、雨がふらなくなりました。プールに行く人が多くなり、プールのけんをうる人がいそがしそうです。こうちゃん(弟)は、ときどきだけべんきょうをします。わたしは、まい日しています。それでは、さようなら。ついしん わたしのうえたひまわりが、お日さまにむかって、きれいにさいています。(ふなこし ふみじ 8/3)

先生 お元気ですか。毎日すずしくなりましたね。今日は、ひさしぶりの雨です。台風がきたのかな。ぼくは、毎日二かいのベットでねています。その下に、すず虫をおいています。たいへんよくないしています。えさは、なすびとかつぶしをやっています。たいへんかわいいです。あと1しゅうかんで二学きです。さようなら。(こばた むねき 8/24)

3学期、「てのひら作文の会」の例会で、『スーホの白い馬』を授業することになった。この担任した子どもたちの保護者の方たちとは、通常の学級懇談会の他に、学期に1回位、日曜日に学校の理科室で懇談会を開いていた。その年も2学期に『かさこじぞう』の教材研究会を開いたばかりであった。

サークルの研究会(1978年2月10日)に保護者の参観があったり(当日の授業は立錐の余地のないくらいの参加者)、協議会にも保護者の方がたくさん残って話し合いに参加もしてくれていた。

その感想を次のように寄せてくれた。

先日は、貴重な授業参観に参加させて頂き、ありがとうございました。いつも感心させられる先生の読書指導や内容の細かさに父兄の私達は心動かされるものがあります。ただ、心を動かされるというより、親として何かジッとしていられない何か、胸いっぱいにはずんでくるのです。

前日の子どもの持ち帰った感想文を楽しく読ませていただきました。わずか8歳なのに、文の読み取りの深さに感心しています。感想文の中で、子どもたちは、殿様の高慢で強欲な非人間性を厳しく戒めています。

子どもたちの心の中は、きっと殿様(悪)に対する憎しみでいっぱいだと思います。今の清らかな澄み切った心をつつまでも忘れないで、正しい人間に成長していただきたいものです。参観の先生方のお話合いも初めて聞かせていただきました。10人10色と申しますが、大勢の先生方、それぞれの思想と学習指導、いろいろ興味深く拝聴致しました。先生方の熱心な教育研究に比べ、子どもの持ち帰ったプリントを一通り目を通すだけで、子どもの勉強のこやしになる物は何一つ与えていない親の立場がとても恥ずかしくなりました。私自身、本当に反省すべき点ばかりでございます。ただ、ある先生のお話の中で、『バスの中で席を譲る時は、顔のいい人、裕福そうな人柄のみに席を譲る』と、子どもに言う親があるとのこと、ショックでした。とても理解できない言葉です。それに対して、先生は、何もおこらなかつたとのこと……何か割り切れない気持ちで帰宅したのは、私一人ではないと思います。親として、とても考えさせられるお話でした。

もうひとりの感想を紹介

先日の授業研究会に出席できたことを大変嬉しくおもっています。若い先生と女の先生の多いのに驚きました。中学校の同級生に偶然会い、懐かしく思いました。父兄が研究会に出席されていたのでびっくりしていた様子で、今までこのようなことがなかったそうですね。いいことですねと、感心していました。話し合いで感じたことですが、本当いって、難しいなとおもいました。けれど、先生の持っている教科書も初めて見ることができました。でも、先生によって、教え方が違うんだなあと思い、1年間に子どもにもグッと差ができるのでは……と思いました。幸い、森先生に2年間もご指導していただき、嬉しさいっぱいです。いただいたプリントも大変勉強になっています。大切にしておきたいです。

3学期には、「ひまわりつうしんNo.207」特別号(3月22日発行)として親子文集を作りました。

桜の花のほころびかけた4月の肌寒い雨の日、期待と不安に胸はずませて小学校生活をスタートした子どもも、もうすぐ3年生になろうとしています。1年2年と続けてお世話になった先生とも、いよいよお別れ。先生のお陰で母子ともども書くことの苦痛と楽しさを味わわせていただきました。読むことは好きでも書くこととなると多分こういう機会がなかったら母から子どもになんて書き表してやることはできなかったでしょう。今夜はひとつ、楽しみながら、子どもの8年余を振り返ってみたいと思います。

昭和44年6月9日、午前3時22分、男女の双子として産まれました。男のター君より10分ばかり遅く産まれた貴女は、体重も2200gと少し少なく、1カ月ほど保育器の中で過ごしました。でも、赤ん坊の頃は、とても手のかからない子で、夜泣きばかりしていたター

君に比べ、夜はよく寝て昼間もほとんど一人遊びをしました。でも、這ったり歩いたりすることは、やはりター君より1ヶ月ばかり遅れて成長していきました。成長するに従い、男のター君は、だんだん腕白になり、貴女はいつも泣かされていましたね。それが、保育園時代には、内向的な性格になったようです。でも、そんな貴女が、もうすぐ学校という時、お父さんが、「ター君に、お兄ちゃんと言いなさい。」と言うと、お父さんの言うことは、いつも絶対であるわが家において、貴女ははっきり「いや」と言いましたね。「どうしていやか」と聞くと、「一緒に産まれたのに、どうしてお兄ちゃんといわなければならないのか。」と、貴女は怒りました。これには、お父さんも参って、それ以来、口にはしなくなりました。それから、小学校に入り、クラスも離れ、男女の差もあらわれ出してくると、貴女は貴女らしく、マイペースでやってきました。そして、ター君と兄妹であると同時によきライバルでもあるようです。おっとりした中にも、負けじ魂があって、1年生の時、ター君が年賀状コンクールに優勝したら、「私も」と2年生で貴女ががんばりました。また、貴女が、「遠足の作文10ページ書く。」と言えば、「ぼくも」とター君も頑張ります。ター君が野球部に入り、子どもなりに充実した日を送り出すと、目標を持たずポツンとしている貴女を見て、せっかく明るく何でも言える子になったのに、また、内向的になってはと、お父さんとお母さんは相談して、以前から習っていたエレクトーンを習い始めましたね。みんな、幼稚園の頃から習っているのに、少し遅いかなと心配しましたが、それなりに頑張っていて、今では、「大きくなったら、エレクトーンの先生になる。」とはりきっています。小さい時から、がまんすることを知り、他のだれよりも思いやりのある優しい貴女が、これからもその優しさとちょっぴりお茶目な明るさのもった娘に成長してくださいね。もっといろいろなことがあり、もっとうまく書こうと思っていたのに、あまり気負い過ぎたのか、思った半分も書けませんでした。でも、大きくなって、お母さんは、私のこと、こんな風に見てくれた時もあったのだなと思ってくれたらそれで結構。よい機会を与えてくださった森先生に感謝します。(岡田 照子)

夏休みに「でんしょばと」を送ってくれた松本のぶただくんは、冬休みもその続きを送ってくれました。松本のぶただくんのお母さんの手記です。

過ぎし日に思う

桜、朝顔、秋桜、梅……の香、あつと言う間に過ぎ去り、梅のほころびも今にも……思い出します。2年前、桜の満開の日、シトシト雨の降る中での松江小学校に入学。前日より、のぶただは、40度を超す熱で床に伏し、母一人で入学式に参列したことは、私、のぶただにとっても一生忘れ得ぬ出来事でしょう。私にと

って、この2年間は、つかの間の日々に終えようとしています。内心、今度良いことがあればほめてやろうと思いつつ、口から出る言葉は、顔を見るたびに、なぜか叱ってばかりの日々、私はこの子に2年間のうち、何をしてやれたのか……。手がかからなくなった上に、勉強、躓ともに先生まかせだったかも知れません。反対に、初めて1年生を受けもたれた先生にとっては、長かったのでは……。一昨年、入学時は、1時間の授業を何回にも分け、途中「先生、オシッコ」という子、1～10までの数字を書くのがやっとの子どもたち、 $2+3$ は、 $8+7$ はを学び、二桁、三桁、くり上がり、繰り下がり、今ではかけ算までできるようになりました。「お母さん、かけ算で便利だな。幾つも幾つもたさなくて済むもの」と言って笑わせます。それに、入学時は、自分のことも満足にできなかったが、今では、目覚め、身支度、朝食、ハミガキ、学校での勉強、帰り、宿題、家庭学習、運動、入浴、睡眠と、一日のスケジュールをきちんと自分のものにして、こなせるようになり、仕事を持ち体の弱い私を助けて、小さいので無理ばかりの弟の面倒もよく見てくれる子に育ちました。これまでに導いて下さった先生のご苦労、身にしみず。ありがとうございました。後一ヶ月余で先生とのお別れは、子どもと共に悲しく思います。このまま、いついつまでもずっと先生にご指導続けて欲しいです。最後に、完璧な人間でないのに、親バカでしょうか、落ち着き+丁寧、それに良いことだけでなく、学校で悪かった出来事も聞かせてくれる子になって欲しいとねがっています。先生の子どもに対する勉強、躓、接し方は、学校生活出発点の子どもに、忘れ得ぬ人として一生残ることでしょう。ありがとうございました。(松本 のぶただの母)

最後に藤池輝和くんのお母さんの手記を載せて、この項を終えたいと思う。

結婚して12年目、子どもも5年生と2年生になりました。長かったようであつという間に過ごしてしまった様な気がします。二人の子どもが小さい頃、アイロンで伸ばすとすぐ大きくなる薬はないかしら、早く小学校へ行くようになったらいいのに……と。でも、二人とも希望通りに手がかからなくなってみると、ベタベタと側から離れられなかった毎日が懐かしいです。主人も帰って来るたびに、膝を二人に占領されるので、「早く、ゆっくりテレビみたいなの」なんて言っていたのに、この頃は、なんだか膝の上が寂しそう。時たま輝和が座っていると、お兄ちゃんもあわてて割り込んで、とても重そうだけど、顔の方はニコニコうれしそう。これからは、段々こんなことなくなって一人前に成長していくのでしょうか。この間、輝和が学校の帰り、お友だちと何か真剣な顔をして話をしている姿を見た時、家では見たことのない少年の顔を見た様で、一瞬ハッとして声をかけるのを忘れる想いでした。い

つまでも小さい赤ちゃんみたいに思っていたのに、知らない間にこんなに成長していたのかと思うと、いつまでも甘えっ子の頼りないお兄ちゃんや輝和だと思っ  
てはいけないんだナー。大声で怒ってばかりいたら、今に、「お母さん失格になっちゃうゾー」と反省させられました。小学校に入ってから、本当にしっかりしてきた二人を見ていると、お母さんもボヤボヤして  
いられない気持ちになります。学校へ行くことが、大好きな子どもたち、病気なんかしないでますます元気で、少しのことでくじけず、たくましく成長してください。森先生、二年間本当にありがとうございました。この二年間は、アツという間に過ぎ去った様な気が致  
します。毎日毎日先生に握手していただいた手のぬくもりは、子どもたちにとって一生忘れられぬ大切な思い出となって胸の中に刻み込まれていることと思いま  
す。子どもが、学校から帰って、その日のできごとをうれしそうに、また、しかられて悲しかったこと等、いろいろなことを話してくれるのと、「ひまわりつうしん」を見せていただくのが、毎日とても楽しかったです。子どもたちと同じ様に、私達ははじめ他の親御さん  
方にもこの二年間、本当に楽しく有意義な毎日であったと想われます。本当に、長い間、小さなチビっ子たちをたくましく成長させていただき、ありがとうございました。これからも、受け持ちは違っても、子ども  
たちのこと、どうかよろしくご指導下さいませ。(藤池芳子)

3月24日の「ひまわりつうしん」210号に「きょう、二年生のおしまいの日です」と題して、次のように書いている。

もう何も申し上げることはありません。ただ一つだけ、元気で学校に子どもたちが来てくれたことです。2月に流感が流行し、本校でも学級閉鎖をした時期でも、欠席人数は最高3名でした。それだけ健康で通してくれたことが何にもましてうれしかったし、病気なんか  
に負けない子どもに今後とも育てていってほしいと思います。極端ないい方をすれば、いくら勉強がよくできて体力がなければ果たしてその子の将来は幸福でしょうか。勉強は、将来幸福になるためにするものであると思います。その土台の身体が弱くてどうして幸福になれるのでしょうか。もう一つ、遊びの問題です。お父さんやお母さんたちの子どもの頃の遊びを今の子どもたちに教えてやってください。子どもは遊びが好きなのです。遊びの中で人間関係やルールや人間的なつながりを育ててくれています。子どもの頃、遊んでばかりいた子は、大人になっても遊んでばかりしている大人になるのでしょうか。むしろ逆であるときえ  
思います。子どもは、遊びの中で学び、遊びと共に育ち、遊びに遊ばれながら、やがて、遊びを乗り越えていくものだと思います。子どもたちの生活を豊かにふくらませてやってください。まだ、人間になって10年

にもなっていないのですから……。2年間、至らぬ取り組みを励ましていただき、どうもありがとうございました。

3月30日、保護者の学級委員さんたちが計画して下さり、打田町のフィールドアスレチックへ行き、親子で1日楽しんできました。

### iii 次の年も1年生を担当、そして、再度2年生へ持ち上がり

次の年も1年生担任、そして持ち上がりであった。

入学式の翌日から「がっきゅうだより」を発行した。それには、「学校での生活が始まったばかりです。早くみんなと仲良くなりたいし、誰かが困っていると助け合えるような人間関係を作りたいと思います。ひとりが十歩歩むより、十人が一歩ずつ歩むような、みんながみんなをよくし合いながら進むような学級にしていきたいと願っています。勉強がよくできることはもちろん、人間としての成長をめざして頑張っていきたいと思っています。子どもたちにとって、学校は楽しくてたまらないところになってほしいし、私たち教師にとっても学校へ来ることが、あたかも恋人にでも会いに来るような、そんな学校(学級)にしたいと思います。一昨年、昨年と一年生、二年生を担当したとはいえ、昨年の子どもと今年の子どもとは違います。産まれてからまだ六年余にしかならない、幼い子どもたちです。何度言っても分かってもらえなかったり、何回言っても聞いてくれなかったり、何度注意しても同じ失敗はつきものだと思います。それだけ子どもたちは未熟な  
のです。それだけ、子どもたちは発達の可能性をもっているのです。それだけ教育という営みの値打ちがあるのです。教育とは、人間が人間を人間に育てあげることだと思います。教師は、動物の調教師ではないのです。途中、くじけそうになったら、はげましてください。お父さんやお母さんたちからののはげましが、私たち教師にとって一番の特効薬なのですから……。」

#### 1学期のできごとのなかから

◆4月の中頃過ぎ、ゆきえちゃんが「先生、みんな私のことをおばけおばけって言いに来る。」と訴えがあった。私は、みんなにその話をしようねと言っておいた。ゆきえちゃんの腕のところに火傷の痕があり、4月初めの頃はまだ長袖だから火傷の痕は目につかないが、やがて半袖になり、また、身体測定などで裸になる機会が増えることによって、学級の子どもたちみんなが、ゆきえちゃんの火傷の痕を目撃することになった。その火傷の痕のことを、子どもたちが「おばけ」といってゆきえちゃんを困らせているのだった。ところが、それから何日かの間にも、ゆきえちゃんが同じことを訴えにきた。ある日、私はゆきえちゃんを前に来てもらい、彼女の肩に手を置いて話し始めた。ゆきえちゃんが、1歳か1歳半の頃の冬、お母さんの不注意で、熱いやかんをひっくり返して、そこに寝ていたゆきえ

ちゃんに、熱いお湯がかかり、ゆきえちゃんが、大やけどをしてしまいました。この腕のところが火傷の痕でケロイドといいます。この火傷の痕をみんなは「おばけ」「おばけ」といって、ゆきえちゃんをこまらせていることを、先生はゆきえちゃんから聞きました。だから、みんなはゆきえちゃんに「おばけ」「おばけ」と言わないでねと言おうとしていたが、急遽、いい方を変更して、次のように語りかけた。二年生や三年生のお兄ちゃんやお姉ちゃん、または四年生や五年生や六年生のお兄ちゃんやおねえちゃんが、もしゆきえちゃんに「おばけ」「おばけ」というようなことがあったら、みんなはゆきえちゃんの味方になってかかっていますか。そう言うと、今まで「おばけ」といっていたであろう子どもたちがみんな「かかっています」と声を揃えて言ってくれたのであった。その日以後、私達の学級の誰も、ゆきえちゃんに「おばけ」という子はいなかった。

◆5月第二日曜日は母の日である。明後日が母の日であるという、今日、金曜日。学級全員のお母さんがそろっているので、お母さんの顔の絵と、お母さんへのお手紙を書こうと呼びかけた。八つ切り画用紙にお母さんの顔の絵を描き、その横に一言二言の母への手紙を書いた。書けない子には私が書いてあげると言ったが、みんな自分で手紙を書いた。

寺口つとむ君は「おかあさんは おとうさんの ばんを しています。」と書いた。他の子どもたちは、ごく普通の「おかあさん げんきに していますか。(こうじ)」「おかあさん かぜを ひかないように してください。(じゅんこ)」「おかあさん いつも ありがとう。(あきよ)」「おかあさんの えを かきました。おかあさんの ごはんを たべて おきなるよ。(よしたか)」「おかあさん おしごと どうですか。(あけみ)」「おかあさん だいすきです。(しげきよ)」「おかあさん なにか かかった ことは ありませんか。かかった ことが あったら できることなら なんでも します。(のりこ)」

翌日、土曜日の学級だよりに全員の手紙を載せ、その後に私の簡単なコメントを載せた。

「子どもたちの てがみを 読んで 思うこと

子どもたちは、その子なりの育ち方のなかで、お母さんたちへの思いを寄せています。お母さんへお手紙を書いてと言うと、文字もロクに知らない子どもたちの、てにをはの間違いや舌足らずの文章であっても、その思いを思い以上に感じる事ができるのです。『おかあさんは お父さんのばんを しています』と書いた寺口くんは、入院したお父さんの看病をしているお母さんの姿を実にリアルに『ばんを しています』と訴えるように感じられます。飾り気のない素朴なコトバのなかに、子どもたちのナマの声を感ずるのです。一生懸命看病しているお母さんに「ごくろうさん」と

書くよりも、もっと強い感動を受けるのは、私ひとりでしょうか。」と。

後日、寺口くんのお母さんから、「先生、あのお便りを病院へ持って行って、病室のみんなでも泣かしてもらったんやで」とお聞きしました。

◆全国道徳教育研究大会を秋に開くことで、前年度から講師の先生に来てもらったり、教材研究や授業研究、そして、小さいけれど、よその学校や教育委員会の先生たちに来てもらって、研究授業もおこなってきた。

6月27日、私の研究授業に教育委員会や他の学校の先生、本校の先生たちが参観に来られていた。授業が始まって、すぐに、オーバーヘッドの電球が切れて、私自身は立ち往生の状態であった。学年の先生たちは、あちこちの教室にあるオーバーヘッドの電球を取って私の教室まで持ってきてくれたり、本体のオーバーヘッドも運んできてくれる先生たちもいた。機械が直るまでの間、蒸し暑い教室で子どもたちは静かに待つことができた。入学して2ヶ月半の子どもたちに拍手を送りたい出来事であった。

◆夏休みの最後の登校日に、「学級だよりの題が『ひろば』に決まりました。このお便りは、子どもたちの姿を伝える広場にしたいと思います。そして、お父さんやお母さんたちの広場にしてほしいと思います。私もこの広場にいろいろ書きたいと思います。出せる限り発行し続けたいと思います。『ひろば』をかわいがってください。」と。

このお便りを出した直後、兵庫宝塚で近畿・東海教育サークル合同研究集會が開かれ、それに参加し、前年度の子どもたちのことを発表した。数日後の夏休みの終わり頃、胸の痛さで診察してもらった「狭心症」と「糖尿病」であった。肥満解消のためにできるだけ穀類をやめて野菜(トマト、胡瓜、レタス、豆腐等々)を毎食食べているうちに、みるみる体重が減り、1か月余りで8kgも少なくなった。ところが、通院して血液検査をするたびに、肝機能の数値が上がっていき、とうとう、医師から「明日から入院しなさい。」と言われ、「急性肝炎」で4ヶ月の入院を余儀なくされた。入院までの9月初めからの体調は、教室にいる時もゴロゴロし、気力が湧いてこない。家で学級通信を書こうとしても、B4の大きさの1/4も書かないうちに根気がなくなってしまうという状態であった。9月初めから入院するまでの40日余りの間に発行した通信はたったの1枚であった。

各家庭を回る「回覧ノート」を9月の学級懇談会で提案して賛成してくれた。その内容を「ひろば」には次のように載っている。「この間の懇談会で、回覧ノートを提案しました。お父さんやお母さんたちが書く生活ノートだと思ってください。日常生活のなかで、見聞きしたこと、考えたこと、教育問題、教師や子ども、



自分の子ども時代のことを思い出して書いてもよく、新聞の切り抜きを貼ってそれについての思いを書いてもよく、テーマは様々でいいのです。子どもたちに『書け、書け』という前に、大人も書いてみましょうというのが、『回覧ノート』の主旨です。週に一回くらいまわってきます。回ってきた時だけ、書けばよいのです。前に書いた人を読んでそれについて自分も書いてもいいのです。要は、順番が来たら1ページかそこら何でも書いて、次の人に回していきます。子どものことで、相談したいことを書いてもよく、それについて回答じみたことを次々と書いていって、紙上討論してもたのしいのではないのでしょうか。『わたしら、そんなん、よう書かんわ。』と思うのははじめのうちです。書けない時は、『今日のうちで一番よく覚えていることを思い出した順番に書けばよいのです。』それでも書けない時は、テレビのドラマについて見た思いや、こんな父親、母親は望ましいのではないかと思う様なことを書くといいと思います。ただ注意したいことは、子どものように大人は素直さが少しなくなりかけてきているので、飾った文章になったり、本音が出なかつたりしがちです。それも続けていくと、段々本音が出てくるものです。明日からノートを回します。子どもを通して持ち帰ります。原則として家で一泊させるだけです。お忙しい時に限り二泊させてもよいことにします。書いてくださったら子どもに持たせてください。厚いノートです。早く一冊終わって反省したいですね。よろしくお願いします。五つのグループにしました。グループ名はノートの表紙の裏に書いてあります。』

このお便りを出したのが10月4日。入院したのが10月12日であった。この提案をした直後、私は4か月の病気休暇に入った。病気休業補充の前田恵子先生は、若い先生だった。何回もお見舞に来てくれ、親たちの間をまわる「回覧ノート」を届けに来てくれた。私のいないところで、順調にノートは保護者の手から手へと渡されていっていた。

2月12日に復帰するまで、2学期の大切な期間と3学期の半分は、子どもたちも親たちも、前田先生にお世話になっていた。

◆2月13日、復帰第一日目、「四ヶ月ぶりに会う子どもたちに、はじめの一言をどんな言葉で再会のあいさつをしようか考えています。先生、元気になったやろ。先生、ちょっとスマートになったやろ。みんな元気だった。おまちどうさま……。子どもたちはどんな顔をするだろうか。そうして、私は次に何を言ったらいいだろうか。お互い、名前も気持ちもわかり合った者どうしの再会。はりつめた気持ちです。再び、よろしく。」

第一日目を終えてと、次の日の学級だより「ひろば」には、次のように書いている。

「全校集会。迎えに行くと、階段を下りて四組さんの前できっちり並んで待っていました。みんな手を挙

げて迎えてくれました。一人ひとりの子どもたちを抱きしめたいような気がしました。体育館でも、きちんとお話を聞けました。腕をぶらぶらしている子も、「背中を伸ばして。」「顔を上げて」と言うと、ピリッとした姿勢になって、聞きました。教室で、固い固い力一杯の両手の握手をしました。力の強い子はおもいきり握りました。私も力一杯にぎり返しました。四ヶ月間の空白……実は空白だったのは私ひとりです。子どもたちは着実に発達していました。細かい指導、一人ひとりの気持ちを大切にここまで育ててくれた前田先生に感謝したいと思います。机の中に置き手紙をしてくれてありました。『…六組の子どもたちは、とてもやりやすく、かわいい子ばかりでした。やりやすい子だけに、もっと伸ばしてやりたかったです。先生からも、すみませんが、子どもたちにとってもかしこくて、かわいい子ばかりだったと伝えていただければ嬉しいです……。』と書かれていました。せっかくここまで育ててくれてあるのに、私がつぶしてしまうのではないかと心配しています。前田先生も、松江小一の六の子どもたちとの学び合いをよい経験に、早く正式採用されてほしいものです。』

◆一年六組の子どもたちとのあゆみを振り返って(3月24日)

もう一年間が過ぎ去ってしまったのかと思う程、月日の経つのが早く感じるのは、私ひとりでしょうか。昨年四月十日の入学式以来、校舎の二階東端の教室での生活が始まりました。家庭訪問、参観日、春の遠足が終わるともう五月。給食が始まりました。あさがおの種まき、母の日のお手紙、一つひとつの出来事のなかに、たくさんの懐かしさとその時のふれあいの暖かさと人間と人間のぬくもりを感じるのです。水泳が始まると、もう夏です。小学校生活初めての長い長い夏休み、たくさんの子どもたちからのお便り。一人ひとりの子どもたちからのお便りの中に、先生への思いを嬉しく感じました。そして、二学期。不意打ちのように病魔が襲ってきました。そして、これからという時に、入院してしまい、本当に申し訳なく思います。その後、四ヶ月間、ご不満もあったことと思いますのに、私の身体をご心配していただき、お陰様で退院も早く、再び一年六組の子どもたちと生活することができました。二学期という子どもたちにとって、伸びる時期に思う存分伸ばしきれなかったことを心苦しく思うとともに、責任をも感じます。やり残した仕事をきちんと成し終えたいと願わずにはおられません。思えば、教師生活十二年目に、子どもたちそして子どもたちの後ろにそっと子どもたちを支えてくれている父母の皆さんの力強さを知りました。そして、そのことによって、ますます教師になってよかったと思ずにはられません。長く別れていても、「先生、先生。」と呼びかけてくれる子どもたち。時として「ママ」と声を掛けられ

たり、「おかあちゃん」と言われたり。自分の子どもでもないのに、えらそうに叱りとばしたり、下の世話までさせてもらったり、教師という仕事は、何と面白い、不思議な仕事だと思います。また、そういう仕事をやるからこそ、昔から先生、先生と慕いつづけられてきたのでしょう。今日、一年六組の子どもたちを二年生に送れることを大変嬉しく、また、六組の子どもたちのよさが私に誇らしささえ与えてくれます。人一倍優しく、意欲をもって真剣に物事に取り組む子どもが多かった六組の子どもたち。優しい思いと物事に心を動かされそこから感じ取る心の豊かな六組の子どもたち。私の今までの教師生活の中で、最も楽しい一年間を過ごさせていただきました。勝手なお願いをしたり、無理な注文をしたり、「広場」に書かせたり、ご苦労も多かったことを思います。すべて、よい思い出として、残しておいてください。そして、子育てという仕事の失敗の多さと、子育てという仕事の欲の深さをこれからも父母と教師が手を取り合って、語り合って進んでいきましょう。思いつくままに書きました。朝、目を覚ますと、今日も精一杯の一日をと 생각합니다。皆様方のご苦労に感謝すると共に、今後も子育てへの深い思いと、私個人への暖かい励ましを。

終業式の日、学級文集第一号を配りました。

#### iv 2年生へ持ち上がりを実現

担任発表の瞬間、「ヤッター」と思った。良かったと思った。これからもう一年、この子どもたちと取り組みができることの喜びがあふれた。

四月九日の「ひろば」には、短いけれど私の決意が書かれています。

「二年生えき 発車

汽車は今、二年生駅を発車いたしました。三年生のゴールを目指して、全員揃って到着したいと思います。途中、幾多の困難もあろうかと思いますが、子どもたちと父母の皆さんを信頼して私の力の限り努力致します。昨年度は、途中大変ご迷惑をおかけいたしました。今年度は身体にも十分気をつけて頑張っていきたいと思っています。」

◆学級文集に対する感想も寄せられ、学級だより「ひろば」に少しずつ紹介していった。

春には雑草が芝生のように生え、はだしになると足の裏がくすぐったいような、ワクワクするようなひとりで笑えてきたものです。だから、春は足から来ると思っていました。夏は雲を見るとわかりました。モクモクとたくましい雲を見ると、「ワーイ、もうすぐ夏休み。」自分の背よりも高い雑草の中を、こわごわ探検にいったものです。夏は、雲が運んでくるのだと思っていました。文集「ひろば」には、そんな私の子どもの頃の広場と少しもかわっていないなあと、読んでいてうれしくなりました。いきいきと生活している子どもたち、少し大きくなった竹の子みたいな子どもたち、

この子どもたちが、大地にしっかり根を張り、たくましく育つよう、私達大人がしてやらなければならないことが、いっぱいあります。楽しかったことも一節。悲しくて泣きたい気持ちも一節。がまんしたことも一節。一節一節が生きている証となるように、そしてそのたびに、大きく心が成長し強い子どもになってくれるよう祈らずにはいられません。この一年間、先生は大変だったことでしょう。でも子どもたちは輝いていたと思います。本当にありがとうございました。これからもお身体を大切に森先生だけのもつたくましく素晴らしい教育を願っています。(徳永)

みんなの作文、一つ一つ楽しく面白く拝見させていただきました。子どもたちは、自分が思ったこと、遊んだこと等自由に書き表している。子どもから見た親の行動や、親の言ったことを自分が思った通りに文として書き表しています。親が小さなことと思っても、子どもには大きなできごとなのだろう。日常生活の中で、子どもたちはいろいろなことを発見して成長してゆくのでしょう。家庭生活も教育の過程として大切だと新たに思いしらされたのであります。(三根)

一年生としての確かな歩みを文集に収められどの子ども、この子ども大変な成長で、あれよ、あれよと驚いています。編集のされ方がいいのは言うまでもないのですが、読み終えて、フーン、すてきやな、こわいよ！とつぶやいてしまいました。文たらずのところでも、ニコニコ笑って、ウンウン頷きながら、いいないなばかりでした。子どもには、参りました。「子どもは、人間として尊ばれる」——まさに尊いと思います。大人より鋭い感性、好奇心、弾力、我慢強さ、マシュマロみたいな柔らかい心……どの子どもこの子ども備わっている。本当に、一の穴の優しい子どもたちに教えられました。親との会話の大切さ(特によく子どもたちの心が見えました)、その生活での成長はどんなにか大切か、ほのぼのの親子も拝見させていただき、見習わせてもらおうと思いました。本当に生きた勉強をさせていただきました。(安井)

◆5月末の「回覧ノートひろば」に、土居くんのお母さんが、「二年六組の皆さん、そろってせせらぎ公園にいきませんか」ということが書かれていたのでこのことを学級だよりに載せてお知らせすると、連絡帳などで賛成の意見を寄せてくれたので、アンケートを実施した。すると父母20名余りと子ども40名余りの参加で、開校記念日(6月6日)に、「せせらぎ公園」に行った。

#### ◆6月の授業参観と懇談会

体育館で体育の授業の参観。教室に帰ってきて学級懇談会。懇談会での自己紹介。

- ・自己紹介あるので、一年の方(弟)へ行こうとしたら、おにいちゃんが、「ひきょうや」と言ったので残った。商売ほってきています。
- ・細いので、何とか太らせようと努力しています。

- ・内弁慶で、こんな席はニガ手です。アーウーでこらえてもらおか。
- ・自分のクラスには、果物屋さんや、散髪屋さんもあります。たくさんのお友達を作ってまたおじゃまするかもしれません。よろしく。
- ・自己紹介あると聞いて、帰ろうと思っていたが、残りました。体育の参観ははらはらしながら見ていた。

◆夏休みはこの年も子どもたちにハガキを出し、子どもたちにもお便りを書いてくれるように言った。

またこの年には夏休み中に1日に何人かずつの子どもたちの家を訪問し子どもたちの夏休みの生活を知るといふ取り組みを行った。子どもたちからの便りは「ひろば」に載せていった。

◆『かさこじぞう』学習会のお誘いとして10月末、午後1時半～4時半まで学校の図書室で実施した。

二期後半の学級だより「ひろば」には、全国の子どもが書いた詩を4編ほどと、紙版画を縮小したもの(1日2名)を載せて発行していった。

11月の末には、「綴り方・作文の勉強会」を土曜日の午後1時に図書室で行った。この会には6名の方が参加してくれた。内容は、「私が教師になるとき決めたこと」「綴り方のかかせる取り組みについて」「学級づくりと綴り方……教師はよき読み手にならなければならない。」そして、どんなにたどたどしい表現であっても、その中に子どもたちの生活と心を読みみたい。

子どもたちの「ぼくのノート」「私のノート」には、詩を書く子どもが段々増えてきた。

11月の参観日には、「かさこじぞう」の授業を観てもらった。その感想のひとつ。

参観日の授業「かさこじぞう」を観てとても楽しかったです。みんなの本読み、すらすらと上手でした。子どもたちは、じいさまに対する気持ちをよく捉えていました。途中までだったので、残念です。子どもが学校から帰ってきて、本を読んでくれました。感情をこめて、あとで、「おかあさん、じいさまとばあさまかわいそうやな。何にも食べるものないのやな。」私は思う。今の子どもに貧乏というのは知らないのでは。お金さえあれば、何でも買える。親の方も買ってあげる。子どもは、また、買ってくれる。これを子どもは当たり前のように思っている。

◆おもちつき

「かさこじぞう」の学習のあとで、じいさまとばあさまがよいお正月ができてよかったというのを自分たちも一緒にお祝いしましょうと、子どもたちと「もちつき」をした。

お土産も持って帰った。

◎昨日、ノートが回ってきて、何を書こうかと考えていたら、明日おもちつきをすること、そして、明日、帰ってきたらお母さんにおもちつきの感想

きかせてね。そのことを書くからね。と子どもに言うてありました。帰ってくると、子どもは「おもやげ」と言って、おもちが3つ入った紙皿をくれました。大きいや小さいの、つるつるのや、しわしわの色々でした。とてもうれしかったです。「先生にね、まるめるの上手やなど、ほめてもらったで。」と子どもが言うてました。「よかったね。おばあちゃん所へ行った時、おもちをまるめたことあったからやね。」「今晚さっそくよばれよかな。」「私は焼いて砂糖しょうゆをつけてね。」「ぼくも、おねえちゃんと一緒にしてや。」とにぎやかな夕食をいただきました。今時、何でもお金を出せば買えるけれど、作る楽しさ、出来上がった時のうれしさ、自分たちで作ったものを食べた喜びを、一生忘れず、おもちを食べるたびに、自分たちも学校で先生と一緒におもちつきをしたことを思い出してほしいと思います。(「回覧ノート」)

◎今日のおもちつき、うまくつけましたか。先生一人で大変だったと思います。でも子どもが喜んで帰ってきて、おもちを見せてくれました。「これ、私らまるめたんやで。」「そう、じょうずやね。」子どもが先生の様子を説明してくれる。「もちが、クルクルまわってるのを、ポイツと取り出して、片栗粉の入っている所へ入れるんやで。」「先生上手やったで。」「そう、先生そんなに上手やったの。」「お母さんらようせんで。」「アンの入ったの、おいしかったよ。」「そうよ、先生の心がこもったんだからよ。」あまり甘いものを食べませんが、今日のアン入りおもち、よっぽどおいしかったんでしょね。(わたしのノートより)

◎おもちありがとうございます。ごめんどうのおいともなく、おおぜいの人を喜ばして下さいました。お心のこもったおくりものをひとしおおいしくいただきました。(連絡帳より)

◆12月の参観は、発表会をした。事前にプログラムを知らせていたので、我が子の出る時間が分かるので兄弟のある保護者は後先を考えて参観できた。発表の内容は、「九九」「本読み」「オルガン」「ノートを読む」「ピアノカ」「ハーモニカ」「なわとび」「工作の説明」などであった。

懇談会の初めに、子どもたちの発表の感想を話してもらった。

・驚くばかりの出来映えであった。 ・子どもの個性を生かしたものであったので、今日の参観は楽しかった。みんなよくできていた。 ・いつもと違って楽しかった。 ・自分の好きなものであったので、子どもたちが生き生きしていたように思う。 ・観させてもらうたびに、みんなの声が大きくなってきているように思う。 ・楽しく見せてもらった。これで二年生かなと思うような子が何人もいた。(あんまりよくできていたので、二年以上の上級生に見えた) ・ほんのちょっとの間に、心も体も一回り大きくなっていた

ように思う。・自分が好きなものをしたので、みんな上手だった。・勉強よりも身体の方を大事にしているの、今日なわとびをしてくれたので、うれしかった。・自分の机での発表ではないので、前に出て発表したの、勇気と緊張もいったのではないだろうか。・今度もこんな参観したいなあ。というような、保護者の感想であった。

#### ◆1月の参観と学級懇談会

参観は、親子で一緒に大きな声でうたを歌おう。若者歌集や歌声で広がったうたなどを20曲ほど印刷しておいた。「一週間」「手のひらを太陽に」「赤いくつ」「赤とんぼ」「二人の山男」「春がよんでるよ」「山の子」「もずが枯れ木で」「みかんの花咲く丘」「思い出」「大きな歌」「月の砂漠」「小さい手を守ろう」「赤い花白い花」「四季の歌」「てのひらのうた」「かあさんのうた」「人食い土人のサムサム」「さんぞくの歌」「秋の子」など。

次の日からの「回覧ノート」や連絡帳には、参観の感想がたくさん寄せられていた。学生時代に戻ったようだった、学生時代以後初めて歌った、時間の過ぎるのが早かった、とてもたのしかった等々。

#### ◆親子文集を発行することについて

2月の初め、「親子文集」作成の提案をした。親子文集の意義……回覧ノート「広場」が各家庭を訪問し始めたのは、子どもたちが1年生の9月末のことでした。それから、今まで、1年半の間、書いたものを読んで、あの人はこんな考え方をしているんだなあ、あの人は、こんな子育ての仕方をしているんだなあと、感心したり学んだり、また逆に、この人の考え方にはちょっと同意できないなあと思われたりしたことだろうと思う。そんななかで、二年間同じ学級にいる父母同士がお互いにお互いを知り合えてきたらとうと喜んでいきます。そして、更に、人間的なふれあいを深め、父母同士が友だちになってくれる一つの役割を果たしてくれたのではないかと、積極的意義を見いだしています。回覧ノート「広場」は、回ってくる時に読み、そして、自分の書きたい時に書き、そして、どんどん回っていきます。後になって読みたいと思った時には、もう手元にはありません。その点、文集だと、いつも手元に置いておけるので、いいのではないかと思います。

子どもに学ぶことを大切にする……子どもたちは、毎日「ぼくのノート」「わたしのノート」を書いているので、書くことへの抵抗はあまりないと思います。ところが、親の方はそうはいかない。子どもに書き方や書くことを学ぶことも大切ではないかと思います。

何をどう表現するか……作文を書くには、対象物をよく観ていなくてはなりません。子どものことを書こうとすれば、子どもをよく見、よく知っていかなくてはなりません。書かれたものを読むこと(文集になって)によって、どのように子どもをとらえたらよいか、どの

ようにしついたらよいか、自ずからわかってくるのではないのでしょうか。

書くことによってかわる……子どもたちは書くことによって成長します。子どもたちは書きたくなるような充実した生活とそれを書くことによって高まってきます。おとなも同じではないのでしょうか。

何を書くか……たとえば、次のようなテーマはどうでしょうか。「子どもの寝顔を見ていたら」「健康になった子」「わが子の成長」「思い出」「母よりあなたへ」「パパの思い出」「心の課題」「私のふるさと」等々たくさん紹介。

どう書くか……自分の好きな文体(書き方)でいいのです。気取った書き方をしなくてもいいのです。お話するような書き方でもいいし、論文調でもいいし、誰かに語りかけるような書き方でもいいのです。文集にする段階で、言い回し方のおかしいところやアテ字などはきちんと訂正します。ご心配なく。

字数・枚数など……一応原稿用紙一人に5枚お渡しします。それ以内でも、それ以上でも、どれだけでもいいです。足りなかったら、子どもに言ってくださると、お渡しします。

そして、子どもたちの詩や作文とともに、保護者の手記とっていい両者の親子文集が完成した。全員の保護者の方の文章がのせられたことが嬉しい。

2年生最後の学習参観と学級懇談会が2月中旬に行われ、その参観・懇談のしおりに私の次のような一文がある。御坊小学校5年生の学年新聞「大地」の「いま一度教育を(教師から父母へ)」を引用したあとで、「私は学級懇談会でいろいろなことを話してきました。夏休みの過ごし方、家庭のしつけ、宿題について、詩や作文やそのほかいろいろ細々した内容だったり。そして、そんな中から、教師と父母は同じ視点に立って子どもを見守っていきたいと思うし、自分の子どもという考えではなく、自分たちの子どもたちという視点をもちたいと思うのです。そして、子どもたちの中にある肯定的側面を見つけ抜けることをより大切にしたいと思うのです。私はいつも次のようなことを思っています。「子どもと体温の違う教師にはなりたくない」「子どもの見える教師になりたい」子育ては欲深くそれだから失敗がつきものなのだという。それだからこそ、子育てに楽しみとロマンがあると思うのです。そして、自分と同じおとなに育てないというところに、いちばんの喜びがあるのではないのでしょうか。足かけ二年になる回覧ノート、せせらぎ公園行きや春休みの楽しい行事や親子文集や、全国のどの先生もしたことのないようなことも、松江小一の六、二の六でできたことを嬉しく思います。」(2/15)

#### ◆「父母よ、わが子育てを語れ」

松江小学校でのこの子どもたちを受けもって、保護者の方たちと取り組んだ『回覧ノート』の一部をまと

めて、和歌山民研の『月報』に「父母よ、わが子育てを語れ」と題したレポートが掲載されている。ここで、その中のいくつかを抜粋したいと思う。

藪田俊平くんのお父さんもお母さんも共働きである。2歳年上のお姉ちゃんとおばあさんの5人家族である。

俊平くんは、

ぼくのおとうちゃんは、きのう夜中にかえってきました。いつも、6時30分すぎには帰ってくるのに、かえってきません。(おとうちゃんおそいなあ)と思いました。そして、7時すぎにもかえりませんでした。リーンとでんわがなりました。(だれやろ)とおもって、おかあちゃんが、「もしもし」といいました。そして、じゅわきをもってきていました。そして、「おとうちゃんやろ。」といって、「なにやってんのや。」ときいて、「よさんや」といいました。「よさんてなんや」ときいたら、「ことしなにつくろか、どんだけお金いるかかんがえてんのや」といいました。そして、おふろからかえってきてからねて、ぼくが、しらんまにねていました。そして、きょうのあさ、ぼくがすこしねぼうして、「おとうちゃんは？」とききました。おとうちゃんが、おきてきて、「おはよう。」といいました。そして、8時に学校にいきました。(1年生2月)

もうひとつ、紹介します。

ちょうひ やぶた しゅんぺい

きょう、ちょうひをあつめました。そして、あさ1回、夕がた1回、よる1回、全ぶで3回しました。そして、あさはほとんどいみませんでした。夕がた、4、5人、よる1人です。そして、12けんまわりました。そして、2千円になりました。全ぶで、2千4百円になりました。(2年生12月)

藪田くんは、体つきの大きな子です。社会的な関心が強く、ニュースもよく見えています。ある時、私が学級の子どもに「出張に行ってくる」と言うと、すかさず、「先生、空出張はあかんぞ。」と言ったのには、驚きました。

労働者であるお母さんは、次の一文を『回覧ノート』に書いてくれていました。

秋の日は短い。仕事をもつ主婦にはそれがまた悲しいほどに短い。朝起きる。二人の子どもをもつ主婦である。家を出るまでの二時間ほどの忙しさは全く大変なのである。軽い朝食の用意、掃除、洗濯、私より後に家を出る子どもたちの登校の準備、まだ寝ぼけている子に無理に食事……など。時にはそこにおまけがつき、汲み取り、ゴミの収集日、と書けば切りがないが、そこは分刻みに決めた手順でこなし、駆け足で電車に乗り出社する。

20名余りの男子社員ばかりの課のたった一人の女子社員。本来の仕事の他に家事そこのけの雑用が待っている。……。一日の仕事の整理、お茶の後始末を終えて、5時30分の退社。駅のホームに立って、あたりを

見回す時、秋の陽は駅前のビルの背中に隠れて人々の顔もさだかでない。

それもつかの間、やがて空に月さえも見えてくる。そして、それから1時間あまり、通勤電車に乗り、松江の駅に着いた頃は駅だけがパッと明るく、一步出た通りは真っ暗。その暗闇の中で、またまた変身をする。サラリーマンから再び子持ちの主婦へ。陽の長い季節は、それが楽しい。夕日に映える土入川の川もや、あたりのいつもの風景にも思わぬ美しさを見つけたり、生き生きとした家々の夕餉の仕事を思い描けて鼻歌まじりに「ヘンシーン」である。だが、これから冬にかけてのそれは違う。妙に気ぜわしく、妙にわびしさを感じさせる。

一日24時間、時はいつも同じ速度で進んでいるのに、自然を天候を相手に働く素朴な農夫でないのに、何か私の身体に夜明けに起き働き、日没にやすむという習性があるのだろうか。すばらしい秋の日よ、「もっと長く」「もう少しそのまま」そう思うところに秋の、特に晩秋の美しさ良さを感じるのかも知れない。(1979, 10, 16)

さらにもうひとつ、一人の母親として、子どもが育っていく様子を書いています。

一日の仕事も終わり、ほっとして二階に上がると、子どもたちの軽い寝息が聞こえてきます。固い三角おむすびのような俊平の寝顔をのぞいているとそのいじらしさに、思わずほおをついたり、手を握ったりしたくなります。何ともだらしな母親ですが、この世の中に、「この子らに勝る何もものもない」と思えてくるのです。たった1800グラムで生まれ、さして大きくない私の掌で、両耳をおおって風呂に入れたのが、ついこの間のことなのに、拵げた自分の手と比べて改めて驚くのです。俊平という変わった名前もこの子にふさわしくなりました。

あれは何？ これは何？ なぜ？ どうして？ 問いかけることばも段々と難しくなっていて、親として、先輩としての私の自信もぐらぐら。「お父さんに聞いてよ。」の連発です。

この頃は、反対に私が質問、子どもが説明するというのも出てきました。そんな時の顔に、すっかり少年のおもかげを見るかと思えば、身丈に合わない幼稚な悪さやけんかをしてかっとなって叱ると、ごめんなさいと言えず、出てくる涙を唇をとがらせてこらえているなさけない顔はおかしいものです。

生まれてから9年。そして、あと9年たてば、どんなになっているでしょう。こんななまぬるい幸せはいやだと、あり余るエネルギーのはけ口を求めて、ちょうど銀河鉄道スリーナインのテツローのように、自分から冒険の旅に出て行ってしまおうのではないのでしょうか。そんな日が、きつくるのです。また、こなくてはいけないのです。その日まで、私はこの子に一体何

をしてやれば一番いいのでしょう。何とも自信のない私です。反対に子どもに教えられ、喜ばされて、いつの間にか旅立ちの朝を迎えて、あわててうろたえるばかりの母親になっていきそうです。

藪田俊平くん親子をずっと見守ってくれているおばあさんは、『回覧ノート』に次のように参加してくれました。

私は69歳にもなりまして、只今は孫の成長ばかりを楽しみにして居ますが、短歌を少しやっていますので、恥ずかしながら少々書いてみました。

- 吾と住む次男も二人の親となり四十二回の誕生日赤飯炊き祝う
- 宿題の自画像描かん鏡に向かふ孫は眼を大きく描きゐる
- 遠足より帰りし孫の「宝物よ」と開きし掌に桜貝光る
- 息子も孫も木曽路の旅に行きしあと一人残りしすしを食みゐる
- 豌豆ご飯デザートに暮今日大寒入りと嫁の言ひつつ食卓に出す

堤圭一くんのお母さんは、「子育ての悩みと喜び」について、回覧ノートに書かれていた。

先日の家庭訪問の際、発表する時の姿勢がよいと褒めていただき、「ヘエーッ」と思ったものでした。家での姿勢というか、態度の悪さときたら、わが家一を誇っている。食事の時はダラダラと最後まで、宿題も漢字など書き出したら何時終わることやらと、ハラハラしてくる。算数も、私が問題を言ってやると、スムーズに進むものの、少し忙しくて途中で相手をしてやれないと、同じように手を止めて遊んでいる。親が構い過ぎるのか、注意力散漫なのか、とにかく、責任の半分は親の私になすりつけようとしているところがある。親のかまい方に問題があるのかとも思うけれど、最近の彼の扱いにはホトホト手を焼いている。一旦ヘソを曲げるとテコでも動かないところがあって、ウンザリする。それも学校ではないということですから、やはり、私に責任があるのかと反省もしてみる。もちろん、森先生がいいところだけをよりだして話して下さっているのはわかって居りますが、他人さんの前でそういうところを出さないだけ、いいと喜ぶべきか、それとも、やはり母の私が悪いのか。もう一度、よく反省してみようと思っています。(1979. 5. 3)

続いて、堤くんのお母さんは書いている。

大好きな箸の回覧ノート、それなのに二泊もさせてしまって、今頃(朝)書いている始末。近頃とみに、しまらないお母さんになってきている。子どもに手がからなくなってきた分、確実に体重を増やしているようなのも気に入らない。そんな母の姿は子どもに映るのか、漢字の宿題など、何時終わることやら。途中で思い出してはおしゃべりしたり、チョコッとおもちゃ

にさわってみたり、ひどい時には、書き終わるまでに三時間もかかっていた。「宿題は毎日ありますが、一時間以内に……」先生のあの言葉、百人力でした。「一時間あればできるンよ。おしゃべり止めよ。」と言いながら、それでも一時間でできたのは、一、二回。その代わり、昨日などは、妹たちを保育所へ迎えに行った間に、ちゃんと売ってくれていましたが……。「おかあさん、いちご五つも売ったよ。」得意満面でした。多い日には、700パックもあるイチゴ。売り残さないように必死の親の姿もまた、よく映っているようです。成長してしまってからでないと、わからない育児の結果。この頃、圭一を見ていると、「私が間違っているのではないか？私の接し方に問題があるのでは？」と、自信がなくなりそうです。試行錯誤の毎日がこわくなってしまいます。(1979. 5. 23)

しかし、当の圭一くんは、どうでしょう。親の心子知らずとでも言うのか、全く気にしていない。圭一くんの作文を二、三のせてみよう。

学校からかえってきたら、お母さんがいてないし、みせも、げんかんも、しまっていたので、うらにまわりました。やっぱり、うらもしまっていました。そして、ぼくが、うちから出ていこうとしたら、お母さんが、えり(妹)のをせてかえってきました。そして、いえに入って、おかあさんといっしょに、おはなしをしました。さいしょは、「だれと思う？」とぼくがいました。そして、おかあさんが、「森先生。」といました。ぼくは、「当たり。」といました。お母さんはよろこびました。ぼくもわらいました。(1979. 4. 10)

はいしゃ

きのう、学校のかえり、おかあさんが、えりをつれて、ほいくしよからかえるとちゅう、ぼくが、はいしゃにいかなあかんかったんで、お母さんが学校のこうもんのはたまで、きてくれていました。おかあさんが、「えり、むかえに、いつてきたら、ついでに、はいしゃまでいっちゃあ。」ってお母さんがいました。お母さんが、「じてんしゃにのっていきなあ。」って、いうたけど、ぼくは、「はしっていく。」って、いきました。そして、はいしゃについて、十ぶんほどまって、おかあさんが、「もう、かえるわ。」ってゆうたんで、ぼくは、「うん。」といました。そして、ちょっとましてから、「堤圭一くん。」とよんでくれたので、ぼくは入りました。そして、ドリルであなをあけて、ぎんばをつめました。そして、「五じまで、なんにもたべやんといてね。」といったので、いえへかえって、すぐにパンたべたかったけど、五じまで、がまんしました。(1979. 4. 18)

にわとり

先生に、きょうは、「にわとり いいんやったら、きふしてよ。」と、いわれたでしょう。それで、きょうはお父さんがもってきてくれたよ。ぼくは、いえでか

いたかったけど、お母さんが、「あかん、あかん。」と  
いいました。ぼくは、夜にかごからにわとりを出して  
もらった。にわとりが、みちにうんこをした。お母さん  
は、「こんなことするから、うちでかいたないんよ。」  
とゆった。(1979. 12. 10)

こうして、堤親子は、一年間の間に、お互いに学び  
合ったというか、お互いに分かり合ったというか(むしろ、  
親が子に学んだという方がよいと思うが……)学年  
末になると、お母さんの悩みも段々薄くなっていっ  
たようだ。やや間を置き、客観的に子どもと接するこ  
とができたとも言っていた。

一月の末、体調を崩していた女の子が、机の上にも  
どしてしまった時、堤くんが雑巾で後片づけをしてく  
れました。終わった雑巾を手洗いで綺麗に濯いでくれ  
ていました。手が冷たさで赤くなりました。雑巾を雑  
巾かけにかけ終わった堤くんに、原島ゆきえちゃんが、  
さっと手渡すニベア。「けいくん、ニベア。」「ありが  
う。」「どういたしまして。」爽やかな光景でした。

3月の親子文集用に堤くんのお母さんが、「かせひき  
狂騒曲」というタイトルで長い文をとどけてくれた。  
初めはご主人の入院でいろんな方に支えてもらって  
いることを書いた後、次のように続いている。

「自分がされてイヤだったこと、言われてつらかつ  
たことは、絶対子どもたちにはできない」とおっしゃ  
った森先生。それが、先生のお人柄かと思われます。  
そんな先生に二年間お世話になって、すっかり逞しく  
成長しました。思いやりのある頼もしい子に育ってく  
れているのが何よりです。誰かがもどした一件は、私  
自身頭が下がる思いでした。子どもの背中をさすって  
やるのも、横を向いて口を押さえてやる私。他人の後  
始末など、とんでもないことです。今のままで、まっ  
すぐ伸びてほしいと思います。森先生バンザイ！二年  
六組バンザイ！（親子文集）

回覧ノート「広場」は、ある意味で、子育て相談の  
広場になった。お互いに知っていることを書き合ひ、  
教えあった。

石井淳子ちゃんは、ぜんそくにかかっている。お母  
さんは、娘のぜんそくの発作のことを次のように訴え  
ている。

今年の梅雨は男性型で大変よく降りましたね。少し  
たくさん降ると、私どもの家は床下浸水になるので、  
梅雨時は一番悩みです。それから、この時期になると、  
もう一つ、心配があります。子どもたちが、必ずと言  
って良いくらい、気管支ぜんそくにかかります。お医  
者さんは、大きくなると、自然に治るといいますが、  
夜なんか、呼吸がしにくくかわいそうです。プールに  
入れなくて、昨日は「お母さん、今日、プールに入  
っていい?」「今日は、のどが、ぜーぜーいっているか  
ら、入れないよ。」という、「そして、お医者さん  
に見てもらってからでなければ、連絡帳に書かない

で。」とあって、どうしても聞きません。今年になっ  
て、一度も入っていないので、よっぽど、入りたかつ  
たのでしょうか。とうとう、学校へ行く前に、お医者様  
に行ってきました。診察してもらい、「治ってから入り  
なさい。」と言われると、ペソをかいていました。仕方  
なしに、連絡帳に書いてと言って書きました。学校に  
入る後ろ姿を見ていると、丈夫になってほしいなあと  
つくづく思いました。何かよい健康法はないものでし  
ょうか。みなさん。(1979. 7. 6)

二学期になって、石井さんは、回覧ノートに次のよ  
うな一文を寄せてくれた。

私には、今、最大の悩み事があります。下の子ども  
二人とも身体が弱いことです。今年になって、はじめ  
てぜんそくと診断されたのです。よく風邪をひきまし  
たが、その時は、気管支炎と言われていました。今年  
の夏休みは、両方とも、よく発作がおきて、医者に駆  
け込みました。夏になると、松江地区は、南風が吹き  
ます。どうしても風向きが家の方へ来るので、バイエ  
ンが飛んでくるのです。この間も、夜中に発作が起こ  
り、夜間救急センターへ行きました。吸入器で少し楽  
になり、大橋を越えて家の方へ向かって車を走らせま  
すと、家の方へ近づくにつれて、また、発作が起こり  
ます。また、センターへ引き返し、紀ノ川大橋の側で  
一夜を明かしました。親子共、つらいことです。発作  
が起こると、一晩中座っています。親もどうしてやる  
こともできないので、一緒になってすわっているのだ  
です。見ていると涙が出てきます。ぜんそくの子ども  
をもつ親にしかわかりませんが、とてもつらいことです。  
何か、治る方法はないのでしょうか。なんでもいい、  
どんなことでもしようと思います。どなたか、教えて  
ください。今日も兄の方が発作で寝ています。(1979.  
9. 19)

ノートを読んだ打田朱美さんのお母さんは、

私の勤務先で、御坊から通勤されている方ですが、  
毎年、お子さんのぜんそくのこと、お月見だったと  
おもうのですが、中松江のお寺へおまじないに来られ  
る人がいます。この方は、今年の四月から御坊勤務と  
なり、こちらにはいませんので、詳しく話しができな  
くてごめんなさい。一度、ご近所の方に聞いてみては  
どうですか。(1979. 9. 29)

私も学級だよりも、「子どものぜんそくによく効く  
薬、よくきくお医者さん、よくきくまじないなど、知  
っていましたが、お知らせください。ぜんそくの子ども  
とのつきあいの仕方など、お知らせください。」と書  
いた。すると、回覧ノートにも、運動会で出会った方  
からも、ぜんそくについて話してくれる方たちがたく  
さんいた。徳永のりこさんのお母さんは、

石井さん、子どもさん二人ともぜんそくだそうで、  
大変つらいことだと、お察し致します。ぜんそくのこ  
とが載っている本がありましたので、先生にことづけ

てありますが、もう、読まれましたか。一にも二にも、身体を鍛えることが大切だと書いてありました。思い切って、水泳なんかさせてみてはいかがでしょう。うちの子どもたちも、風邪をひくと、すぐにノドにきて、セキがひどく大変こまりました。ある本に、セキには、大根とハチミツが良いと書いてありましたので、さっそく大根を1センチ角ぐらいに切り、コーヒの空きビンに一杯入れ、その上から、ハチミツをたっぷりかけます。30分もすると、大根のしるがハチミツにとけて出てきます。それを飲ませると不思議とよくきき、近所の方たちに、教えてあげたところ、好評です。一日も早く、よくなられますよう、お祈りいたしております。(1979. 10. 14.)

ノートの端に走り書きしてくれた福田くんのお母さん。

ひろばNo.122で、ぜんそくのことを書いてありました。西松江に寂光院というお寺があります。一年に一回、お月見の日に、おまじないをしてくれます。三年行ってください。

本人の石井淳子ちゃんは、

きのう、ぜんそくふうじのお寺のところで、たまごをもって、いえへかえって、五じから六じの間、たまごをのみました。そして、なまでたべました。たべたとき、いやなかじだ。ごはんとき、むねがいたかった。(1979. 11. 5.)

それから後、石井さんからの、ぜんそくの話は消えていった。発作がきえたのであれば、いいのだが……

2年生のまとめとして、「親子文集」を発行することを提案すると、賛成してくれ、書けない方は『回覧ノート』に書いたものの中から選び、子どもの作文や詩とともに、保護者全員が掲載されることになった。

冊子の文集は、1年生の3学期に1冊と、2年生の1学期に2冊と、3学期に1冊の合計4冊発行している。第4号は子ども編100ページ、保護者編54ページ、合計154ページの分厚い文集であった。

ひろば 寺口 潤子

三冊のファイルにおさまった「ひろば」を開きながら、二年間を振り返ってみました。一年の母の日の言葉に泣かされた9号、せせらぎ公園に行きたくないと泣かれ、びっくりして「ひろば」を読み返した87号、学生時代に戻ったように、楽しく歌った参観日の168号。「ひろば」のおかげで、子どもたちの学校での様子が手にとるようにわかりました。先生もお忙しいでしょうに、お体の具合もお悪い時もあったでしょうに、本当に細かいところへまでのお心づかいが、ひしひしと感ぜられる一枚一枚です。子どもたちが、年月を経て、それを開いて見た時、入学して不安と期待の入り交じった一年生、少し自信のついた二年生、共に過ごした先生と六組のお友だちとの思い出が懐かしく思い出されることでしょう。子どもたちにとっても、父兄

にとりましても、なにものにも勝る先生からの贈り物だと思えます。いつまでも大切にしたいと思えます。先生 本当に二年間、ありがとうございました。これからも健康に注意して頑張ってください。皆様もくれぐれもお身体を大切にしてください。

二年間をふりかえって 林

暦の上では立春を過ぎたものの、まだまだ寒い日が続いています。今度、二年六組の親子文集を書くことになるので、何を書いているのか、苦しいです。子どもたちの二年間の様子について書こうと思います。

今から二年前、何も知らずに小学校に入学し、担任の先生は男の先生だったので、こわい先生かと思っていたようですが、「やさしい森先生よ。」と、学校から帰ると言うので、安心しました。学校の中を先生と手をつないで見学したそうです。そのうち給食が始まり、家では好き嫌いの激しい子どもなので、心配しました。だんだん学校にも慣れ、お友だちもよく家に遊びに来てくれるようになりました。春の遠足の時も、先生と並んでお弁当を食べたそうです。そのうち、プール開きがあり、長い夏休みが終わって二学期が始まり、まもなく、先生の身体の調子が悪くなり、入院して、前田先生の授業を受けるようになりました。運動会も、森先生のいない運動会でした。クラスのリレーで、一年六組が優勝した時も、きっと先生に見て頂きたかったと思えます。そして、先生の身体の調子も段々よくなり、子どもたちも首を長くして待っていたようです。そうして、もとの授業にもどりました。親子でせせらぎ公園に行って、ドッジボールをして遊んだこと、川の中で滑りこけパンツや服を乾かしたこと、楽しい思い出です。先生の希望で、二年生も受け持ってもらって下さり、子どもたちも大変喜びました。一年生から続いている「ひろば」、毎日楽しく読ませてもらっています。また、授業参観の時でも、子どもたちが先生によくなっているのがよくわかります。子どもたちの気持ちになって、話しているのだと思えます。二年生になって段々漢字も多くなるし、算数も九九を習うようになり、勉強に力が入ってきたようです。三年生になると、クラスが変わるし、また、先生も変わることで、あと、残り少ない三学期をみんな勉強に遊びにはげんでほしいと思えます。先生、二年間どうもありがとうございました。

母と子そして森先生との出会い 土居 キヨ子

1971年、朝から陣痛が始まる。丸正百貨店の側の岩尾先生の所に、主人の車で、朝六時半に入る。そして、夜七時十分に大きな泣き声が聞こえたそうですが、私はしんどさで声なんかわかりませんでした。先生は、「土居さん、男の子ですよ。」と言って私に見せてくれました。これが母と子の最初の出会でした。私は、最初から男の子と思い、男子物しか作ってなかったのに、男やでと先生に言われた時も、何も感じませんでした。



した。初めて見た息子の顔といたら、すごく長く、まるで馬なみで、普通になるかと心配したくらいでした。毎日、すくすく大きくなり、六ヶ月で初めて突発性発疹にかかり、熱が出ましたがたいしたことはありませんでした。私は仕事をもっているのです、お乳は座布団を台にして、一人で飲みました。よく泣く子で、ほっておくと、一時間でも二時間でも泣いていて、裏のご主人が、「サンパツ屋の子、どこか悪いんとちがうか。見てきちゃれ。」と奥さんに言ってくれたことが、何回もあるそうです。初めての節句は、舞鶴のおじいちゃんが、大きなこいのぼりを持って、紅白の大きなおもちをついて、もってきてくれました。私の田舎から、杉の木の高いのを切ってきてもらって、裏の広場で悠々と泳がしたものです。家の前はドブ川。家がふえるにつれて、何人も前のドブに落ちたので、この子はあまり外に出しませんでしたが、二つ、三つになると、そうはいきません。雨の日は決まって裏の広場の水たまりで、泳いでいるのです。ドロでまっ黒な顔をして、水につかっている姿を見た時、私は面白くなって、最後まで泳がしていました。みんなから見たら、おかしい親子とおもったことでしょうね。こんなこともありました。保育所の入園式に、はだして家に逃げ帰り、無理に連れて式に出ました。翌日の午前十時頃、私が仕事をしていると、橋の上に寿がいるのです。その時、私は何も思わず、ああ、外で遊んでいるなど安心して仕事をしていると、保育所から電話があり、「寿くん、帰ってませんか。」私は、その時、保育所に行っていることに気がつきませんでした。園長先生のおっしゃるには、「保育園を逃げて帰ったのは、ここでは、寿くんが初めてです。」と言われましたが、その後、そんなことは一度もなく、三年間通ってくれました。

そして、楽しみにしていた入学式。親は子どもより美しく着飾って出かけました。泣かへんかな？どんな先生にかかるのかな？勉強はみんなについていけるかな？いろいろなことを胸に思いました。

一日目、寿は、「森先生や。男の先生やで。」と、嬉しそうに帰ってきました。それが、早、二年生も終わろうとしています。一年二年と、二年間、勉強はもちろんですが、親にはできないいろいろなことを先生は子どもにたくさん与えてくれました。それは、親として、いいようのない嬉しさです。感謝にたえません。この森先生との出会いを大切に、これからも育ててほしいと思います。最後に、自分の考えで、自分の道が良いこと悪いこと、どんなにも変わるということを教えていきたいと思います。人の道を進むよう、見守っていききたいと思います。

この文集のあとがきの中から少し引用して、この項を終わりたいと思う。

あとがき 森 教 二

一年間書き綴ってきた「ぼくのノート」「わたしのノ

ート」の中から、二学期から三学期にかけての作文を、文集に載せることにしました。一人ひとりの作文を読むと、その時、その時の子どもたちの息づかいまでも感じます。その時の心の動き、胸の高鳴り、頬の赤らみ、目の輝きまでも、読む者は感じます。そして、それらの伝わってくる感動の中から、文章の書きぶりにまで個性があることがわかるのです。長い間、子どもたちの書いたものを読んでいると、名前を見なくてもこの書きぶりだとあの子だな、こんな表現の仕方をするのはこの子だな、この文体はあの子だな、この観察力の鋭いのはあの子だな、この感じ方をする子はこの子だなと、わかってくるものです。一人ひとりの文章を書く癖がわかってくるのです。文章を書く時だけでなく、物を見、物に感動した感動の仕方や思い方やその子の心まで、ぐんと伝わってくるのです。その子その子の人となりがわかるのです。私の目の前で書いているように見えるのです。子どもたちが、三年生になってからも、無理やりではなく、物を書く癖をつけてあげてほしいと思います。受動的な消費文化のなかで、書くことというとても大きな抵抗のある仕事の値打ちを認識してほしいと思います。

次はお母さんたちの作文です。私は書いてくれた内容について批評したり批判したりする力はありませんが、感想を一言書かせていただきたいと思います。私が受け持った子どもたちに、その子たちを自分の命よりも大事に育ててきたお母さんたちがいるのです。その母があつてこそ、私がかう持っている子どもたちがいるということです。しごく当たり前のことです。その当たり前のことがすごく大切に思えてならないのです。私は教師です。一年間の間だけ子どもたちを教えることをする先生です。つまり、期限のある子育てです。しかし、お母さんたちは、違うのです。どんなに子育てがしんどくても、母親はその子どもから逃げることはできないのです。私は、お母さんたちの作文の中から、教師以上の大きな力を感じたのです。難しいことを言うのではなく、何も説教するのでもなく、ただ、毎日毎日子どもにガミガミと小言ばかり言っているお母さんであるのに、教師にはない子育ての力を感じるのです。そして、自分の子どものことについて、何とよく知っているのだろうかと思うのです。(以下略)

2年生の終わりの春休みには、「加太少年自然の家」まで出かけていった。ほとんどの子どもや保護者の皆さんが参加してくれていた。

## (2)サークル運動

「てのひら作文の会」の会長や「和歌山県民間教育サークル連絡協議会」の事務局の仕事を受け持ちながら、「てのひら」から全国教研に参加してもらったり、私自身、和歌山の県教研で国語教育分科会以外の分科会への参加は1回もない。ここ40年ほどの間、ずうっ

と国語教育いっぱいであった。毎年、県サークル連協の「夏の集会」の準備をし、「てのひら」での若い先生たちと学び合いを続けていった。

この頃、サークルでもない、組合でもない、先生たちの学びたいことを学ぼうという「まるまる学校」というものを組織した。1974年(昭和49年)市教職員組合の教文部長になった。その年の12月に、次のような「〇〇(まるまる)学校実行委員会へのおさそい」の手紙を出している。「(前略)現在、教育問題を中心に各分野から期待をかけられ、反面、教師論をめぐって様々な議論が出されています。今ほど、父母からも、子どもからも、教育実践の質を問われている時はないのではないのでしょうか。私達教師は、素晴らしい授業をしたい、みんなにわかるように教えたい、学級づくりをどうしたらいいのかなど、悩みながらいつの間にか日がたち、月が過ぎ、1年間が知らないうちに過ぎてしまって、後悔に似た悔やみだけが残ってしまうのは、私だけなのでしょう。さて、このたび、市教組教文部、青年部、市サークル連協の三者が協力して、来年度の1学期に若い先生方を対象に、〇〇学校を開きたいと考えています。〇〇学校では、同和教育、生活指導、障害児教育、教室の文化、国語科教育、作文教育、算数教育、美術教育などの入門講座を予定しています。(〇〇学校の〇〇はみんなで考えてつけます)く」ということになっていましたが、最後まで、〇〇学校のままでした。組合は、教育理念だけを論じておればよいというのではなく、教え方にまで及ばなくては、本当に教師の力量を高めることはできないと思います。(後略) 〇〇学校実行委員会準備会代表・教文部長 森 教二」として各学校に出している。そして、1月の第1回実行委員会には、39名の方々が実行委員になってくれた。それ以後、月に1回以上の実行委員会を開き、講師の選定と講座開催日の決定をしていった。

月に1回の学習会と、学期に1回の交流会を続けていった。これには、多くの若い先生たちが結集してきた。今日的に言えば、「先生の学校」だったので。学期毎のまとめもきちんとした、事務的にもよく力を発揮してくれる方たちが多かった。

ここに開催日と講師と講座内容と参加者数を記録しておく。

- 5月22日 「生活指導——こんな学級にしたい」  
(吉川 薫雄先生) 91名
- 6月5日 「教室で楽しいゲーム・楽しい歌」  
(井澤 慶三先生) 82名
- 6月19日 「一人ひとりの意見を大切に作る学級づくり」  
(堀井 雅文先生) 58名
- 7月3日 「1学期をぐるる会」 30名
- 8月12日 「2学期はこんなことをしたいなあ」 30名

この5回のまとめを集録として発行している。また、200曲以上の歌集を3日間で仕上げた。

- 9月18日 「授業と板書とノート」  
(吉川 薫雄先生) 45名
- 10月9日 「子どもを知るにはどうすれば……」  
(実宝 裕先生) 30名
- 11月7日 「国語の力をどう伸ばすか」  
(笠松 浩二先生) 35名
- 12月4日 「社会の力をどう伸ばすか」  
(丹羽 純先生) 20名
- この4回分の集録も編集している。
- 1月20日 「切り絵を通した学級づくり」  
(高木 陽行先生) 30名
- 2月26日 「障害児の問題」  
(前川 尚子先生) 40名
- 3月15日 「わかる算数をめざして」  
(加藤 元昭先生) 20名

これらの取り組みを通して感じることは、若い先生たちのエネルギーだった。細かいテープ起こしも、ピラ発行も、責任をもって実行してくれた。そうすることが、自分自身も育っていくことになったと思う。

1878年の第18回和歌山県民間教育研究集会の全体会で、「綴り方で育つ子どもたち」と題して実践報告をしている。特別報告は「教育課程問題と教育実践の課題」と題して「指導要領で、創意の時間を新設したことに関して、宮城教育大学附属小学校に白樺の時間のことについて」山田昇先生が報告している。

民間教育サークルで、「季刊 和歌山の教育」を発行しはじめた。長年の願いだった。それにも何回か原稿が掲載されている。

『季刊 和歌山の教育』が休刊し、民研が『月報』を発刊した。1980年4月からである。

### (3)組合運動

松江小学校に変わってからの、教職員組合への関わりは、半日ストライキへの参加と全一日ストライキへの参加、そして、「ストライキ参加者氏名公表問題」また、前後するが、教頭法制化問題、和歌山市長選、等々の大きな課題がある中で、時々小さな闘いは、勤務時間29分カットのストライキ(実力行使)であった。その29分カットへの参加は、松江分会ではいつも堀井桃世先生と私の二人だけであった。この堀井先生は、私が野崎小学校へ赴任した新任の時、担任発表(4月3日か5日)した時、音楽の専科教員に任ぜられた時「私は音楽の専科はいやです。」とはっきり発言した先生であった。

この氏名公表の問題で、PTAの役員にまで、ストライキ参加者の氏名が市教育委員会から送りつけられてきた。私達松江分会としてPTAの学級委員の方たちに、「これらの氏名はみなさんにとっては必要でない文書であるので、お返しいただきたい。」という手紙を送った。

そのことと、学校に不満をもっていたある保護者が、

子どもを学校に行かさないと行動に出た。その間に入って中心的な働きをして下さった上田四郎先生は、入院している病室に事の経過等を伝えてくださった。

野崎小学校時代から、県青年部の常任委員で教育文化担当で、県青年教研や県青年文化祭を企画実践してきた。手元に県青年教研の基調報告がある。

(前略)第一に現在の青年教師の実態、第二に各支部の青年教研の取り組みの実態、特に和歌山市の取り組みについて。第三に、労働組合青年部として教研運動をどう進めていくのか、どう青年部活動の中で教研を位置づけていくのかということ若干報告したいと思います。

最近、若い先生がたくさん採用されて、和歌山県内でも青年教職員は全体の1/3、約1500名になっています。そして、そのほとんどが教師になって4年までの方々です。その人たちは、しんどいしんどい、集金事務、給食、雑務に手間取り子どもと遊ぶ暇もない。放課後は職員会議ばかりで教材研究をする間もなく、全部家に持って帰る始末です。先輩の先生の昔話を聞くと、昔はよく子どもと遊んだりしたというのです。まったく夢のような話です。要領が悪く、事務が遅いので、他の先生にも気を使う。また、私達のサークルの仲間が新任の時、学級通信を出そうとしたら検閲をされたり、文集を出そうとするとストップをかけたり、若い先生が自分が思うようなことができない状態にあるということです。また、若い先生は、怒り方・ほめ方、宿題の出し方さえもわからないのです。大きな声を出して喉を痛めてしまったり、甘かったり、厳しかったりどうしたらいいのかわからないというのが、青年教師の日々の実践上の悩みであるわけです。また、しんどくても休めない。休んだら同学年の相担に迷惑がかかる。そんな職場がたくさんあるのではないのでしょうか。

青年教研というのは、あまり聞き慣れない言葉ではないかと思います。和歌山県で最初に取り組んだのは和歌山市です。1968年12月に開かれました。県青年部体育大会は5回を成功させ、また文化祭典も昨年度に続いて2回目を成功させました。この和歌山市での第1回の青年教研がもたれてから足かけ3年になりますが、それでもまだ全県下的に各支部全体のものに定着化してきたとは言えません。熊本で開かれた全国教研の時に「青年の懇談会」に参加して、和歌山市の青年教研のことを報告しましたが、全国的にはまれな実践であったわけです。その後、文部省は、毎年毎年新任者研修会を重視し、今年4900万円の予算を組んで強化してきました。来年度71年度は今年の倍の予算を準備しているということです。他の多くの府県では、辞令発令後の1週間ほど、夏休み中に10日間という日程で新任教員に教育の理念・原理・教員の服務規定を一方的に解説・説明しています。また、一見、悩みを

聞くということで交流会ももたれているということです。兵庫県では、「教員と校長の関係は、囚人と看守の関係である」というような特別権力関係論を中心にした無茶苦茶な内容の研修会をおこなっています。和歌山県内でも、昨年度は実演授業というような風変わりな授業を強制してみたり、新任教師の悩みや要求や気持ちを見無視したものを行いました。今年度の初任研では、一定の前進があったとはいえ、自校研修、他校研修という形で、初任者をバラバラにさせ、各個撃破的な研修をおこないました。また、私達青年教職員の中には、講師採用や期限付採用という身分不安定な方々がたくさんいます。中教審は、新採用についてはまた一つ不安定な身分制度を加えました。それは試補制度というものです。「大学卒業後、1年間『試補』として実地研修をし、その後教員に採用する」という制度です。こうした官制側の初任者研修会に対して、自分たちの側から、教育内容を創造していこうということで、全国的に青年教職員の教育研究集会在活発化してきました。(中略)和歌山市の青年教研が、各支部に比べて進んでいる理由を少し考えてみたいと思います。和歌山市には、ここ数年来、青年教師が増し、そのなかで各種の教育研究サークルが生まれ、サークル不毛の土地と言われたいた和歌山市にも、「てのひら作文の会」「歴教協和歌山市支部」「いぶき」「若い教師の会」その他のサークルとして、「ドルナド合唱団」「新任の会」「本を読む会」などが育ってきています。このようなサークル活動を背景にして、教研活動も前進してきました。各サークル員が教研の実行委員になって取り組んできました。従って、和歌山市の青年教研の内容や形式や方法は、どうしてもサークル的な発想になってしまうのも無理はないと思います。しかし、青年教研というからには、教職員組合青年部として青年教師全体を教研にどう組織していくのか、つまり、組合運動のなかに教研活動をどう位置づけるのかというのが、和歌山市としての課題でもあると思います。それがすなわち、県青年部としての課題でもあるわけです。

私達の青年教研は、官制研修反対というような野党的な立場を守るのではなく、憲法や教育基本法に示された、あくまでも人間形成が主要な場としての学校で、子どもたちにその能力を全面的に花開くような、知識や技術を正しく与え、科学的な思考力を身につけさせ、社会進歩の担い手となりうる人格を育成するという立場で、むしろ、与党的な立場で教育研究活動を積んでいくべきであるし、そのために集団的に、その内容と形式と方法を究明していくのが、青年教研の方向であると思います。

親組合の教研があるのに、なぜ、あえて青年教研をするのかという青年教研独自の果たす役割、意義について考えたいと思います。日教組20年の教研は、日本の民間教育運動の理論や実践の軸であり、私達が受

け継いでいくべき貴重な遺産でもあります。その理論や実践は、文部省の理論に対決していく武器でもあるのです。しかし、私達青年教師は、この20年間の教研運動のなかで積み上げてきた成果を今すぐに自分のものに消化できるでしょうか。できないと思います。私達青年教師は、日頃、日々の実践に疑問を持ち、悩み続けています。それらの悩みや問題点を話し合う場がないのです。日教組教研の中では、もうすでに議論され尽くされた問題点を、この同じ年代の者が寄り集まって同じような素朴な問題を出し合っ、みんなの中で確信をもって方向を見いだしていく、実践し確かめる——長い教師生活の中で、そういう太い柱をつくるのが、この青年教研の大きな意義であると思います。日教組教研20年間の歴史と遺産を学びながら、一方では同じ身近な問題を学ぶ。そして、その教育の観点をお互いに学び合いたいものです。

和歌山県の子どもの将来を見通し、教師の良心を揺さぶり、教師の良心に灯をともしることができるように、今日・明日の青年教研のなかで確信をもって何かを学び、掴んで職場や地域に持って帰ってほしいと思います。(以下略)

松江小学校へ転勤してしばらくたってから、市教組の教文部長になり、県教研や市教研を組織し、集会を開催してきた。

#### (4)職場での同僚性と人間関係

松江小学校での教師生活のなかで、心の沈む出来事があった。松江小学校での最後の勤務になった年だったと思う。年度末の職員会議で反省会をしていた時、学校運営や教科指導などの項目が過ぎていき、ある反省のプリントを見ていた時、どうもこのプリントに誤字が多いと思った私は、(おそらく多くの先生たちがそうおもっているであろうと思い)言わなくてもいいのに口を開いてしまった。「すみません。このプリント誤字が多いのは、子どもが書いたのですか。」と聞いた。すると、それを書いた担当の学年の先生から、「違います。先生がかきました。」とややきつい声で返ってきた。「あー、まずいことを言ってしまった。」と思ったが遅かった。

翌日の職員朝礼で、前日に私が発言をしたことに対する謝罪と、私の発言はそれを書いた先生に対する問題発言であったことを謝った。

それ以後、どこでその先生と出会っても、一言の声も掛けてもらえなかった。あの職員会議での音が消えてしまったような雰囲気の中での、「あーしまった。」という思いが、退職した後も、ずっとひきずったままである。

松江小学校の6年間は、父母に支えられ、父母たちも無理な要求も受け入れてくれた、私にとって一人前の教師に育ててくれた職場・地域であったと感謝して

いる。研究校での無理な取り組みはあったにしても、個人の研究や実践は保障されている学校であった。この松江での取り組みが、後の私の取り組みを太らせてくれたものと思っている。

## 2. 木本小学校での2年間

松江小学校から木本小学校へ、平野先生と共に転勤した。木本小学校では、2年間とも1年生の担任であった。この2年間の特徴的な事例のみを記載したい。(1)御坊市名田小学校の先生たちが、臨時休業にして、私の授業を観にきてくれた。

木本小学校で1年目。「同和教育における授業と教材研究会」を日高郡でうけることになった。私は文学教育2年生、「かさこじぞう」の分科会担当になった。授業者は名田小学校の雑賀栄子先生であった。何度か名田小学校を訪問し、先生たちと教材研究や、他の授業も見せてもらった。しばらくして、いついつの日、学校を臨時休校にして、森先生の学級の授業を見せてほしいという連絡があった。「かさこじぞう」は2年生の教材だが、1年生で何かよい教材はないか探して、「からすのおうさま」(はぐるま教材)を選んで授業をすることになった。当日1時間か2時間授業をして、職員全員が木本小学校に来てくれた。私は、事前に本校の平田校長先生にまず授業を観てほしいとお願いし、名田小学校全職員が来られることを話した。当時の木本小学校は分校を造るはなしをしている最中だったので、マンモス校であり、先生の数は多かった。全校の子どもは、体育館に一杯になるほどであった。当日の授業はまずまずであったが、後々、平野先生が、「森先生が、授業を観てくださいって平田校長に言ってくれたことを校長は大変喜んでいた。」と聞かせてくれた。

(2)産休講師の男性教師が、忘れ物が多いということで、4年生担任のこども27名に教室の床を5往復なめさせたこと 木本小学校で2年目。

表題のとおり、忘れ物をした子ども27人に、教室の床を5往復なめさせたという事件が起こった。さっそく、担任は学年主任と謝罪に一軒一軒家庭訪問をした。教育委員会からも呼び出しがあって、そこで注意をうけたであろうことは推察できた。女性の年配の先生たちは、なぜ校長と一緒にいってやらないのかとおこっていた。その講師の先生は、何か悪いことをして、それを直そうとするには、辱めをすると直ると信じているようだった。自分も、子どもの頃、担任の股の下をくぐらされたという経験をもっていた。そして、問題が一段落したとき、その産休講師の先生は、子どもに謝罪するのに、自分も教室の床を舐めたということを知った。これは、当時、箆口令が敷かれていたが、もう30年も経過しているの、時効だと思い、今回正式に表現するこ

とにした。ところが、しばらくして、校長が、「ほめ方、しかりかた」という1枚のプリントを出して、職員研修のつもりだったのだろうと思うが、「教育技術」の「落第教師になるための十箇条」というようなものを出してきた。子どもの叱り方とは別のものであった。そこで、私は「学級で子どもと生活していて、子どもに言い聞かせたいというようなとき、どうしていますか。」というようにいい方で、全教師に水を向けた。すると、出るわ出るわ、きょうびの子は殴らなかつたらいうことを聞かないと言う声があちこちから、若い先生からの発言があった。あまり沢山体罰肯定の意見が出てきたので、私が立って「でも、殴ろうと思って、手を上げて、その手はおろさなあかんと思う」と言ったかと思うと、突然、「森先生、先生はいつもええ事ばっかというやんか。」とヤジが飛んだ。私は、教師をしている間に注意を受けたり、叱られたりしたことはあっても、発言中にやじられたことは、初めてであった。

(3)「先生は、発言力があるから、係から提案してきて、あまり意見をいわないようにしてほしい」という同僚の言葉。

ある日の放課後、私と年齢がそんなに変わらない教師が、私にはなしたいことがあると言って、校舎の端のほうでこんな話をした。「森先生は、発言力があるから、いちいち、提案にたいして質問や意見などをいわないようにしてもらえないか。提案者もいろいろ考えて提案してきているのだから。」というような内容であった。私は、「そんなことはようしない。」と断った。どこからかそんなことがいわれているのかなと思った。

(4)気になる校長、気になる教師、

①四月、新任の教師が赴任してきて、校長室で面談している時、校長がその若い先生に、「必」の筆順正しく書かせたり、「飛」を正しく書かせたりなど、若い先生を試すということがあった。

その若い先生から話しを聞いてそんなことおかしいことではないかと、私が若い先生に言う。「こんなことには、慣れっこになっています。」という返事であった。

②職員室で、1年生担任のとなりの先生が、大きな声で、子どもをしかっている。何か先生の気にいらなかったののだろうか。私は、職員室で子どもを叱るのは一番嫌いであった。自分が叱るのも、誰かが叱っているのを見たり聞いたりするのもいやだったから、聞かないようにしていたら、急に、「となりの森先生にも聞いてもらいなさい。」といったので、「私は聞きたくないです。」と言った。

③となりの②の先生が、7月、一学期の成績のことで、大きな声で一人しゃべっている。「アサガオの観察をしていない子は、成績をCにする」という。ど

ういうことかと聞いてみると、「ある子は水をやらなくて、アサガオを枯らしてしまったそうである。だから、Cである」という。私は、「子どもがアサガオの種を蒔いて、なかなか芽がでてこない。友だちの芽が出てほくのアサガオはまだ芽が出ないと何日も言いにくる。そんな時、教師が蒔いておいた種のなかで、今、芽が出たばかりの芽をその子の植木鉢に植えておいてあげると、明るく日、ほくのアサガオの芽が出たと一番に言いにくるよ。教師ってそんな仕事をするもんだと思うよ。子どもが水をやらずに枯らしてしまう前に、先生が水をあげやなあかんのとちがう。」と。

私と一緒に松江小学校から木本小学校に転勤してきた平野先生は、1年で楠見小学校へ転勤していった。時々、平野先生が木本小学校に来た時に、言葉は悪いが、「連れ子で来たのに、捨て子にされた」と言っていると、次の年に、楠見小学校へ転勤することになった。

木本小学校での子どもとの取り組みは、紙数の関係で割愛させていたたくことにする。ただ、特筆すべきことは、2年目に児童詩を書かせる実践をしたことである。日本作文の会の児童詩集に掲載されたことと、雑誌『どの子も伸びる』に「子どもたちは書く、どんどん書く」というテーマで、児童詩に取り組んだ実践を掲載されている。2年間、ほぼ毎日学級だよりを出し続けたことも、特筆すべき内容であったのと、夏休み中に地域毎に数人集まってもらって、夏の生活を話し合ったり宿題をしたりという取り組み(松江小のは個人)をしたことが大きく変わった実践であったと思う。(森)

### Ⅲ 生活綴方教師としての森教二の成長

#### ーライフストーリーから見えてきた世界ー

この時期の森教二は、教師生活も10年を迎え、教師として大きな成長を遂げた時期である。とりわけ、松江小学校での6年間は、学生時代以来、森が学び続けてきた生活綴方を基底においた教育実践も、確かな成果をもたらしてきた時期と言えらるだろう。

その特徴は、どういった点にあるのだろうか。

第1は、子どもとその生活をまるごととらえ、それを豊かに太らせていく生活指導の実践と、そうした生活とそこでの自分の内面を見つめ、表現する生活綴方の実践が結合されて、本格的に実践されたことである。

森は、松江小学校での教育実践を始めるに当たって、次のように述べている。すなわち、「松江小学校の教育実践の方向は、子どもが書いてきたものを大事にし、それを手がかりにして学び合っていくという、私が大学生の頃に学び、野崎小学校で『てのひら作文の会』で学び合ってきたものと相違はないように思えたので、『見たこと帳』や『生活ノート』『ほくのノート』『私のノート』の取り組みはすんなりと入ってきた。従っ

て、始業式の次の日から書くことを始めることができた」というものである。つまり、松江小学校の実践の基底にも、これまで森が生活綴方教師としてこだわってきた作文教育・生活綴方が位置づけられているのである。

それは、直場の同僚の先生との対話のなかで、「先生は、長い間先生をしていて、子どもとの接し方もたくさん引き出しがありますが、私には、何もない。この学級だよりが頼りです」と森はいつも言うことになっているところにも表れている。

ところで、森はそうした作文教育・生活綴方をどのようにとらえているのであろうか。松江小学校時代の1970年代前半は、作文教育の歴史のなかで、野名一田宮論争<sup>3)</sup>など、生活綴方のあり方や、日本作文の会の1962年方針<sup>4)</sup>をめぐる、様々な議論が行われた時期である。森は、そうした時期に、どのような考えを持っていたのか。彼の指摘を見てみよう。

「一日の生活のなかで、時間的・空間的な切り取りのできる(表現できる)力を育てることは、作文指導といういい方であっても作文教育といういい方であっても、大切であろうと思います。単なる文章表現指導では、子どもの生活は律しきれずはありません。生活が表現を支えています。そのためにこそ、生活を大事にみていきたいし、子どもたちの生活を耕すことを重視したいと思います。生活を耕す、掘り起こすという表現は抽象的だけれど、子どもたちの遊びの生活を一番大切に、そこに依拠しながら、どんなことにも一生懸命からだを動かし、そのことから自分の頭でいろいろな思いを感じられるようにしたいと思うのです。」

「『私が教師になるとき決心したこと』『綴り方をかかせる取り組みについて』『学級づくりと綴り方……教師はよき読み手にならなければならない。』そして、どんなにたどたどしい表現であっても、その中に子どもたちの生活と心を読みみたい。」

ここに表れているように、森は、文章表現指導の定式化を図るというより、子どもとその生活をまるごととらえ、その生活そのものを豊かに太らせていくことを通して、それを表現させ、また、それを教室の仲間と読みあうことを通して、子どもを自立の世界へ導いて行ったのである。

それは、志摩陽吾氏がいう、生活綴方における生活と認識と表現の関係をめぐって、「認識と表現」の軸ではなく、「生活と表現」の軸を通して、実践をとらえていたということである<sup>5)</sup>。

第2は、子どもをまるごととらえる森の実践が、この時期、とりわけ低学年を数多く担任することを通して、低学年教育という形で結実してきたということである。それは、低学年の子どもがどのようにことばを獲得していくかということのすじみちへのこだわりと

ともに、そのことを可能にする低学年教育の教育内容とそれを具体的に実現する教育実践、とりわけ口頭作文に代表される低学年に固有の生活綴方の教育実践の探究という形で表れたと思われる。

第3は、子どもを真ん中において、教師と父母・保護者がともに進める教育実践が展開されたということである。

森は、子どもだけではなく、父母・保護者にも、書くことを勧め、松江小学校時代は、親子文集など多様な取り組みを展開した。それは、どのような意図なのであろうか。

森は、次のように述べている。すなわち、「『ひまわりつつしん』が通算100号を突破したとき、保護者の皆さんに『突破記念という意味もあって、お父さん、お母さんたちの文集を作ろう』と呼びかけたところ、半数以上の皆さんが文を寄せてくれた。それを『ひまわりつつしん』120号(7月19日発行)特集として20ページの文集を発行した。

初めにのところで、私が、濱田廣介著『大将の銅像』(大正11年刊)の『序の言葉』に島崎藤村が書いているのを全文載せている。その後、私の若干の言葉を添えている。『何とやさしい心でしょう。それでいて、子どもをこんなにもまるごとつかまえたいい方でしょう。……今日、目の前にいる子どもは、もう、昨日の子どもではないというおどろきと、一人ひとりの子どもたちの個性が世界中のどんな書物にも載っていないという、つまり、青い蟬でありながら、全て特異な存在であるという子どもたちへの働きかけを今更ながら難しく思えてくるのです。……今、教育というコトバが『狂育』になったり、『脅育』になったりしそうです。』と書いた」というものである。

つまり、1970年代前半の時期は、落ちこぼれ問題が社会問題化し始めた時期であり、能力主義的な競争にとられ始めた保護者が、竹内常一氏が指摘するような受験に打ち勝つための「学力」保障を学校に求める「下からの能力主義」を展開するなかで、子どもをまるごととらえ、子どもから出発する教育や子育ての重要性を共有したかったのではないか。そうした子どものとらえ方を共有しながら、共同の実践を展開したために、親子文集を提案したのである。

今日、ともすれば、父母との対立が強調されるなかで、モンスターペアレントなどの問題が議論されているが、こうした森の指摘に学ぶことの意味は大きい。

第4に、若手教師の成長と自立を集团的に保障する自主的な取り組みを積極的に展開したということである。

こうした若手教師の自立をどのように構想すればいいのか。いいかえれば、そもそも教師になるとは、どうということなのであるか。それを4つの立場に分けて、見てみよう。

第一は、「制度的な自立」である。具体的には、教員採用試験に受かることが教師になるという意味にとらえるものである。つまり、最も日常用語のレベルでの意味を示している。しかし、この立場では、教師とはそもそもどのような関わりをする存在なのかという本質的な問いかけがない。

第二は、「体制的自立」である。これは、学校や教員に対する支配体制に合わせた「自立」で、今日、様々に強められている傾向である。この立場は、むしろ自立というより、服従ないし従属といった方が、問題の本質をよく表している。

第三は、「競争的な自立」である。これは、教員に求められる資質・能力を、他の教員と競争することを通して獲得しようとするものである。人事考課などの教員評価に対応したものである。しかし、教員の成長や自立は、他の教員と競争して実現されるものではなく、学び合い、支え合う同僚性のなかで実現されるものではないか。

第四は、「関係的な自立」である。それは、子どもや保護者に教師として、人間として関わり続けるなかで、未熟ではあっても、「一人の教師」として必要とされ、承認してもらうことによって、教師になるととらえる立場である。森は、この第四の立場で、教師の自立を考えたのである。

このような教師の4つの自立像という視点からすると、森が追求したのは、「関係的自立」であったことはいうまでもない。森自身も30代を迎え、職場の中堅教員として、若手職員を次代の担い手としてどう育てていく

かという問題意識に立った時、制度や競争を介したのではなく、教員が相互に支え合い、助け合い、学び合う関係のなかで、自主的に育ち合う場として、サークルや組合の教研活動を大切にしたのである。

また、松江小学校時代に代表されるように、個々の教育実践の自由を尊重しつつ、研究授業で、オーバーヘッドが切れた時に、すぐに支えてくれたことに典型的に表れているような、職場づくりを大切にしてきたことも特筆されよう。こうしたなかで、森は、教員が育つ「場づくり」を進めてきたのである。(船越)

#### 注

- 1) 和歌山県の有名な生活綴方教師である森教二のライフヒストリーの第Ⅰ期から第Ⅲ期については、船越勝・森教二「森教二のライフヒストリー研究—和歌山県における生活綴方教師の一典型—」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第62集、2012年参照。
- 2) 佐古田好一氏は、部落問題研究所を中心に、文学読本「はぐるま」や生活綴方の実践で大きな指導力を発揮した。
- 3) 野名竜二氏と田宮輝夫氏の間で行われた論争。その詳細については、村山士郎著『生活綴方実践論』(青木書店、1985年)をさしあたり参照されたい。
- 4) 日本作文の会の基本方針で、生活綴方の重荷を下ろすことをめぐって、大きな論争を呼んだ。この方針の内容及びそれに対する批判については、前掲 村山著『生活綴方実践論』及び同著『現代の子どもと生活綴方実践』新読書社、2007年参照。
- 5) 志摩陽伍著『生活綴方と教育』(青木書店、1984年)所収の論文「生活綴方における生活の認識と生活の組織」を参照されたい。